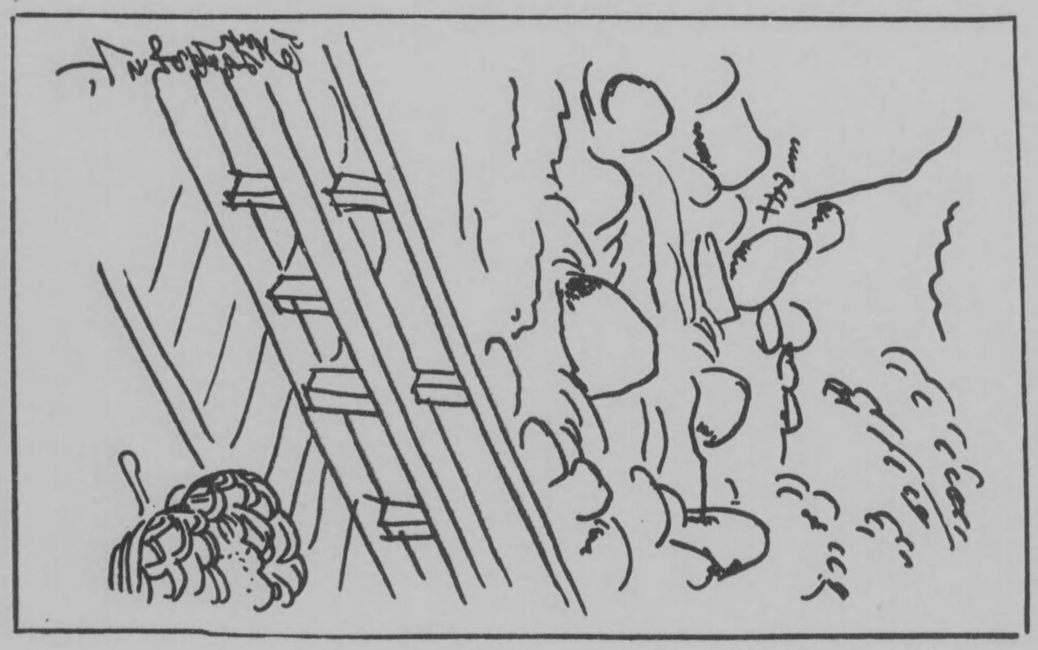
岳泉溫前肥

遠
から
阿蘇

阿蘇戸下温泉



阿蘇戸ノ下温泉

阿蘇栃ノ木温泉

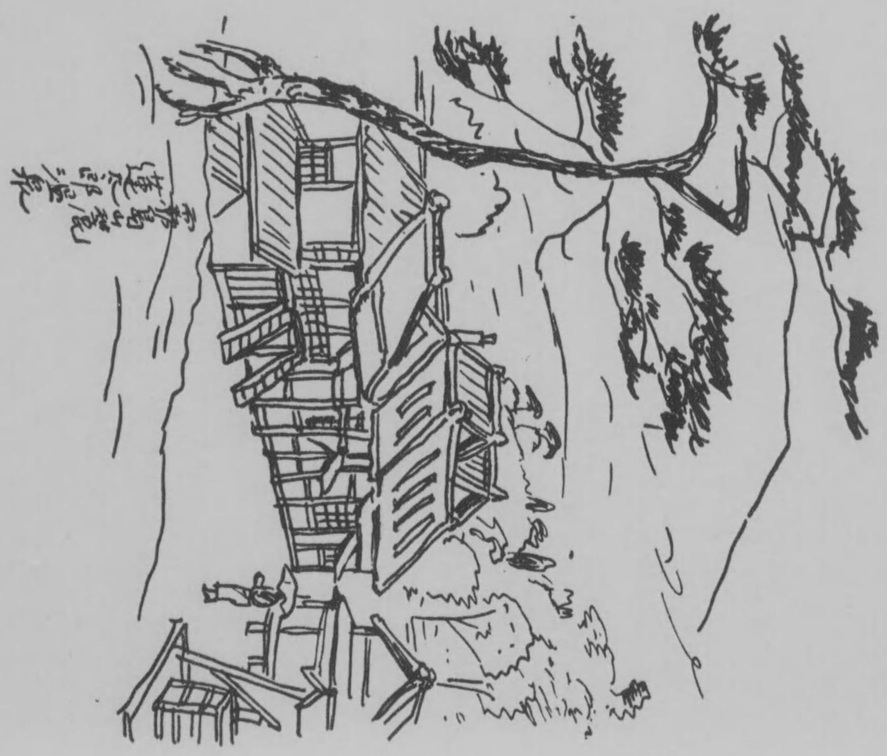
阿蘇栃ノ木溫泉

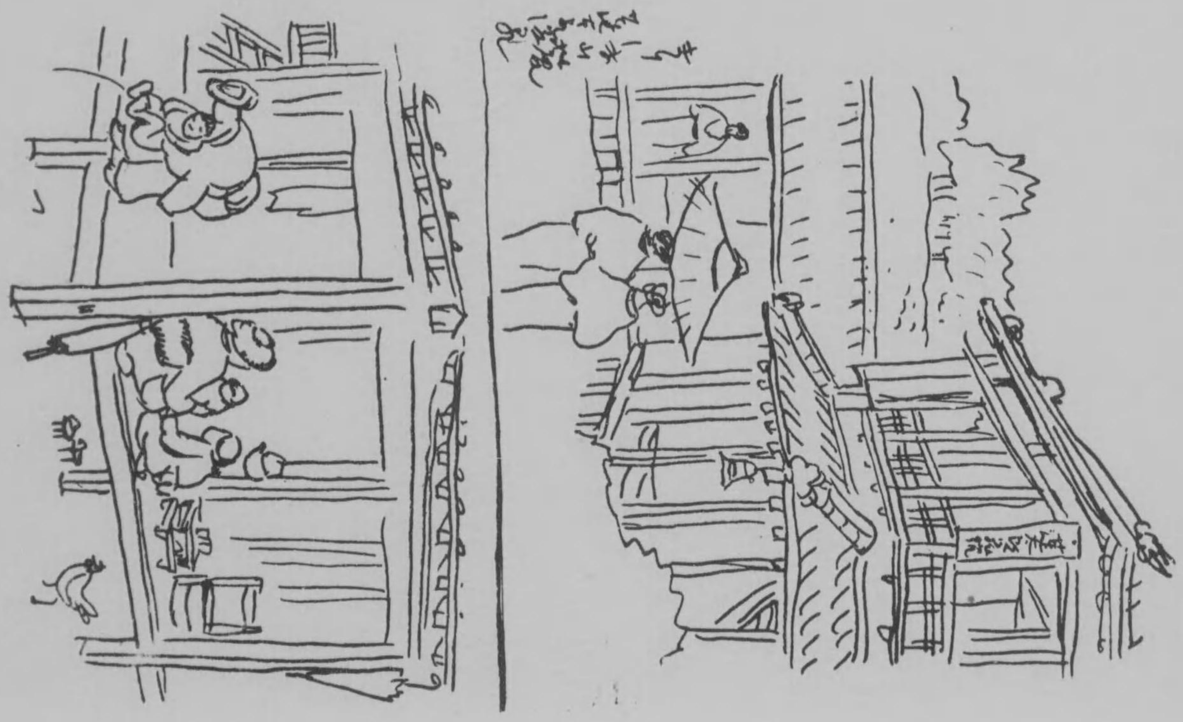
阿蘇栃ノ木溫泉

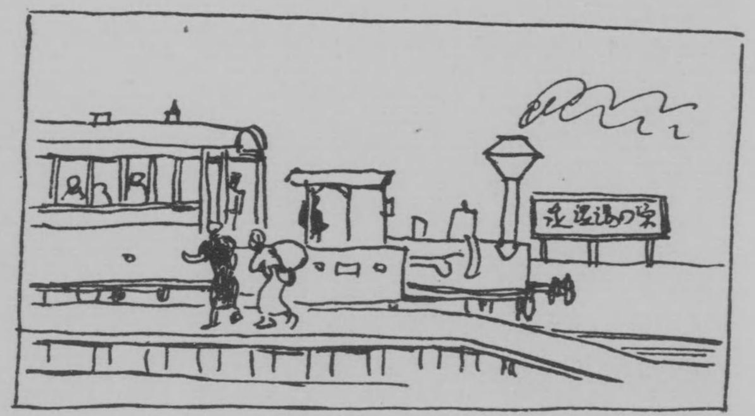
阿蘇栃ノ木溫泉

阿蘇栃ノ木温泉

阿蘇栃ノ木温泉







見　所　向　日

日向所見

一

箱根は電車が出來てから全く勝手が違つて了つた。山も別の山だ。溪流も別の溪流だ。さういふ氣がした。今までは下から上を仰ぐやうに登つて行つたものであつたが、今は上から覗くやうにして通つて行く。そしてあの早川の深い谷が益深く、ところに由つては、覗いて見ても見えない位になつて了つた。

電車で行くと、あの賑やかな中にも、昔の街道筋の溫泉場らしい氣分の殘つてゐる湯本も、あの猫の額のやうなところにいくつとなく橋を架けて、何處の浴舍の窓を明けて見ても山が鼻先につかえるやうな塔の澤も、あの何遍となく折れ曲つて登つて行く早川の深い谷に添つた道も、大きな谷を隔てゝ遙かに宮の下の人家を望む太平臺の休茶屋も、あの賑やかな山の上の都會と言は

れた宮の下も、またはあの谷の底深く、渓流の音に全く埋れ盡されて了つたやうな堂ケ島も、萬年橋のかゝつてゐる蛇骨川の深い谷も、小田原陣の時に秀吉の入浴したといふ太閤風呂の址も、底倉の瀟洒な靜かな溫泉場も、木賀の世離れた感じの好い旅舍も、更に、右に蛇骨川の谿谷に沿つて次第に高原らしい感じを深くして來る小涌谷の臺地も、夏の末から秋草が亂れ發いて、籃輿の上に女の草履と一緒に色の濃い桔梗の結ひつけられる蘆の湯の高原も、何も彼も下に見くだして、そして一直線に高い高い强羅公園へと行つて了ふのであつた。だから、太平臺とか、宮の下とか、小涌谷とかいふ電車の停留場はあつても、そこに行くには、それからまだ五町乃至十町を驀地に下らなければならないのであつた。長い間、箱根の山水に馴れてゐる身には、不思議な、目新しい、丸で違つたところに來たやうな感じを起させるのも無理ではなかつた。

私は曾つて箱根の裏山めぐりをやつたことがあつた。その時分は、無論まだこの電車は出來てゐなかつた。私は塔の澤、太平臺、宮の下、底倉、木賀といふ風に歩いて、河床の高くなつた早川の流に沿つて、それから蕎麥の名物の宮城野へと入つて行つた。今、考へて見ると、私はそこ

から少し引返して、木挽が大きな木を挽いてゐるところからそのまゝ山路へとかゝつて行つたやうだつた。そしてその山路を十町ほど歩くと、向うには鷹の巣山、下には蛇骨川の谿谷、更に遠くその蛇骨川が早川に注ぎ込んでゐるさまがそれとはつきり指されて、何とも言はれず展望の好いところがあつた。そしてその附近の雜木林の中には、誰の別莊地とか、誰それの溫泉經營地とか言ふ風に書かれた木柱が到るところに立てられてあつたのであつた。『はゝア、これは今に開けるな！』その時、私はかう思つたのであつたが、十年經つか經たない中に、そこが强羅公園となつて、今のやうなあの立派な設備が出來やうとは？

しかし强羅は――本當の强羅は、大きな浴場のあるのできごえた强羅は、山田一郎が始めて讀賣の日曜附錄で世間に紹介してそれから名高くなつた强羅は、まだずつと奥にあるのであつた。一里半ぐらゐは何うしてもまだ歩かなければならないのであつた。

私はその間の林の中の路を今でもはつきりと思ひ出すことが出來た。行つても行つても盡きない林の路、藪地で、上が柔かで、それで爪先上りになつてゐるために、一歩毎に足があとに戻る

やうな氣がして、容易にその目的とするところに達することが出來なかつた。それは丁度新緑の頃だつた。樹々の若葉が美しく、駒鳥の聲が、鈴でも振るやうにあたりに響きわたつてきこえた。私は疲れた足を引摺りながら歩いた。

その強羅の溫泉のあるところは、高原の上の平地で、今の強羅公園よりは更に更に展望のひらけたところだつた。そこらあたりまで行くと、箱根も最早都會人に玩弄された人工的の箱根ではなくて、全く原始に近い山といふ感を多分に持つた箱根のやうな氣がした。霧も麓で見るやうなものでなく、時の間に晴れてはかゝり、かゝつてはまた晴れた。その下にあの雜踏した繁榮な箱根があるとは思へないほど、それほどあたりは靜かで、そして世離れてゐた。

二

今でもあの路を通るものがあるであらうか。昔は、電車のない以前には、裏山めぐりと言つて、そこから大湧谷に行き、閻魔ヶ臺に行き、それから密林を通つて姥子へ行き、そこに一夜泊つて、あくる日は、湖尻へ十五六町、そこから舟で蘆の湖を箱根の驛へと渡つて行つたものであつたが——。

この間は是非一度は通つて見なければならないところだつた。大湧谷もちよつと面白いが、それよりも閻魔ヶ臺から見下した蘆の湖が何とも言はれなかつた。

私は一番先に密林を見た。美しい密林を見た。そしてその密林の盡きたところに群青で塗つたやうな色の濃い湖水——始めちよつと見た時には、密林のつゞきかと思つたくらゐそれくらゐ色の濃い湖水の一角を見た。そしてその湖水の面には、富士が靜かにその倒影を蘸してゐた。

それに、その時、運よく午後四時すぎの光線がずつと右から深くさし込んで來てゐて、それが一種言ふに言はれない感じを山にも、密林にも、湖水にも與へた。私はじつと立盡した。

蘆の湖は山中の湖水としては、何方かに言へば平凡だ。中禪寺湖のやうな深さを、幽邃さを決して持つてゐない。正面から見ては、あまりにあらはになりすぎてゐる。山中の湖水といふ氣がしない。しかし、此處から見た時には、流石にさう言ひ切つて了ふことが出來ないやうな氣がした。

私は最近に行つたといふ人に、姥子の溫泉のことを訊いて見た。

『さア、別に變りはありますまい。』

『でも、僕の行つた時にも、隨分古い家だつたから、もう改築したらうと思ふが？』

『さうですな、改築したんでせう。そんなに古くないやうでした』

『矢張、一軒きりないにはないんでせうか？』

『さうのやうです』

『あれから閻魔ヶ臺の方へ出て來たんですか？』

『いゝえ、すぐあとに引返して、湖尻から湖畔を歩いて來ました……』

『さうですか？　それは惜しいことをしましたね？　閻魔ヶ臺から大湧谷の方へ來れば好かつた——』

『さうも思つたんですけどもね、さうすると、向うに下りて了はなければなりませんから……。さうすると、驛に歸つて來るのが大變ですから』

『それはさうだね……。箱根の宿を本據にしてゐては、何うしても、さういふことになるね。そして、その湖尻からの路は何うだね？』

『あそこは別に他の奇はありませんね。さう——？　中禪寺湖の菖蒲ヶ濱まで行く木立の中？あのやうなもんですね？』

『では、湖尻から船で行く方が好いですな……』

『それはその方が好いですとも……』

『二里位ですか？』

『さうですな、二里には少し遠いかも知れませんな』

それは箱根の驛の本陣の別莊に一月以上もゐた人だつた。その人はいろ〳〵なことを話した。箱根の舊道のことも話せば、昔そこを通つた人達の宿帳がその本陣に殘つてゐることも話した。昔は今日では想像することが出來ないほどそれほど賑かであつたらしかつた。大石良雄のサインなどもその宿帳に殘つてゐるといふことだつた。私はその人の話で、いろ〳〵とその時分のことを想像した。

三

『玉くしけ箱根の山の山おろしに風引きますな早かへりませ』冬の初め頃まで蘆の湯に籠つてゐた友達にあてて、はがきにかういふ歌を書いてやつたことがあつた。その時分の蘆の湯！

落葉がガサガサとあたりにころがつて、湯氣が白く地上に這つてゐる時分の蘆の湯！

毎日のやうに夕日に銀色にかゞやいた薄の穗も、やがては初雪に埋められて了ふであらう。その白い湯氣も全く冬に閉ぢこめられて了ふであらう。かう思ふと、そこに冬を過した友達の言葉などが思ひ出されて來た。丸で冬はガラアキだからね。二階も三階も雨戸を閉めて、家族のゐるところに近い便利な室に火燵をして貰つて、そしてひつこんでゐるんだからね……。だから、爲事は出來るには出來るがね。ちとさびしすぎるね。食ふものはそれでもあゝした溫泉としては先づある方だらう。何しろ始終、下と交通があるからね……。不便なことはちつともないよ。寒い

には寒いな。すつかり吹晒らしだからね。あの恩人碑のあるあたりに出ると、手も顔もきれるやうに寒いからな……。え……溫泉の人達は何うして暮してゐるッていふのかえ？　面白いロウマンスもあるだらうッて言ふのかえ？　さア、詳しくきいたら、君の小説の種になる話の一つ二つはいつでもころがつてゐるんだと思ふけれど……。何しろ、あそこにゐる人達は、冬は何にも用がないんだからね。酒を飲むか、湯に入るか、子供でも拵へるか、それより他に用がないんだからね。だから、何うしても享樂的な氣分が一面に漲つてゐるね。男と女のことなんか平氣の平佐だね。朝飯前のことのやうに思つてゐるかも知れないよ。現に、僕のゐる家なんか、妻と妾と一緒にゐるんだからね……。それに、あゝいふ稼業では、始終さういふ享樂的のシインを見せつけられてゐるからね。かれ等の生活だッて、何うしたッてさういふことになつて行くんだね？』

『さうかな』

『それに、酒ばかり飲んでゐるよ。あそこにね、おもしろい按摩がゐてね。それがいろ〳〵な話をして呉れたがね？　何うしてもかういふところはいけねえ。何うしたッて、命を短くしちやう……かう言つてゐたね。たしかにさうだね？』

『それに、賭博もやるだらう？』

『何うしても、さういふこともやるらしいね？　何と言つても不健全だよ。ちよつとは面白くつても、長くゐては、體がつゞかないやうなところかも知れないよ』

『さうだらうな』

こんな話をしたことを私は思ひ出した。箱根では私は一番先に蘆の湯に行つた。紀の國屋に行き、龜屋に行つた。そこから駒ケ岳へも登つた。

小湧谷も僕等が行く時分から比べると、非常によくなつた。今では箱根の何處の溫泉にも負けない位の設備が出來た。春はことに好い。あの時分栽えた櫻樹は非常に大きくなつた。

底倉から蛇骨川の岸を掠めて、小湧谷の人家を右に望みながら、次第に蘆の湯の方へと上つて行く路は、私に取つてなつかしい忘れ難いところであつた。そこでは私は色の濃い桔梗をさがした。また雪の晴れた日に蘆の湯の方から下りて來て、『玉くしげはこねの山の朝日影雪はつもれと

春めきにけり』といふ歌を詠んだ。兄と下りて來たこともあれば、友達とのほつて行つたこともある。籃輿で夜遲くのぼつて行くと、向うから提燈が一つほつつりやつて來た。『あれは迎へだんべい？　蘆の湯から來ただんべい？』かう言ひながら上つて行くと、果してそれは夜になるのを心配して、底倉で電話をかけて置いたために、そのためにわざ〳〵迎へに來たのであつた。

『おオい、おオい』

『迎へに來たんけえ？』

かういふ聲が高原に響きわたつてきこえた。

一度は蘆の湯から兄と一緒に舊道――須雲川の谿谷の方へと出て來た。この谷は昔東海道時分には非常に榮えたところであつたけれども――休茶屋が休茶屋へと連つてゐたやうなところであつたけれども、今は全く荒廢して、單に人通りがないばかりでなく、好奇に此方に入つて來るものも漸く少くなつて行つた。石ばかりごろごろところがつてゐるやうな路になつた。

それといふのも、この谷には、溫泉といふものが一つも存在してゐないからであつた。山一つ

隔てた早川の谿谷には、あのやうに澤山に溫泉か湧出してゐるのに、此處には一つもそれがないとは？　村にも、谷にも、矢張幸不幸はあるのであつた。それに、早川の谷に比べては、此方は谷も淺く溪流もあらはに、人の心を惹くやうなものが尠くなかつた。唯、なつかしいのは、ところどころに殘つてゐる大きな並木松ばかりであつた。

しかし、此方から――湯本の玉だれの瀧のある方から入つて行つて、畠あたりまで行く間は、ちよつと感じが好かつた。二子山はそこから見たのが一番見事でもあり雄大でもあつた。裾がひろく延いてゐる形も何となしに人の心を惹いた。そこには水力電氣――その箱根の電車を運轉させる水力電氣の工事がしてあつて、湯本から一里ほど行つたところに、その大きな水溜のたまつてゐるのを私は見た。

畠まで行く間の並木松は、いかにも昔の東海道の賑かさを思はせずには置かないやうなものであつた。靜かな靜かなその松の聲の中には、遠くすぎ去つた昔のさまざまの追憶が深くこめられてあるやうな氣がした。

しかしこの舊道も見やうに由つては面白かつた。曾て榮えて――驚かるゝほど榮えて、その榮えたさまを繪とか物語とかの中に殘して、そして再びもとの自然のさびしさの中に戻つて行つたさまは、心ある旅客の思を惹かすには置かなかつた。自動車が通り、電車が通つて、全く開け盡した早川の谷の山一つ此方に、かういふさびしい溪谷が、時には石ころ道を、時には大きな並木松を、時には曲物の材料をつくることを一年の生計にしてゐるやうな山村を、または水車を、急に嶮しくなつて行く山路を、段々細く細くなつて行く溪流を展けてゐるのは面白かつた。

四

もう今から三十年も前だ。塔の澤の環翠樓にゐた友達のE君からよこした手紙の中に、私は左の一文を發見した。

それは半紙にぶつつけに書いたものだつた。E君とて、それをいつまで殘して置かれやうなどとは思はなかつたに相違なかつた。しかし、私にはその一枚の寫生の文章がいかにも面白く感じられた。箱根を思ふと――少くとも塔の澤を思ふと、すぐその文章が思ひ出された。私はそれを引いて見る。

此頃の月こそ美しけれ。兄の好む寒月なり。山中の寒月、また歌はざるべからず。暗黑々、たゞ枯枝の風に鳴り、溪流の岩に鳴る、その聲のみを聞いて暗黑々の折柄――星の空や、燈火の山やいづれかわかち難きの折柄――月出るらし、雲の、恰も錦糸を以て端縫したる模樣の如き雲

の、見えそめ、既に月は里に出てたるを知れども、山中この光を受くるは未だ數分の後にあらん。と見る内、空いよ〳〵明るくなれり。山益々黑くなれり。斯くの如くして空と山との區別は定まりたり。されどその黑き山や、わが室の緣側より起りたる黑色一帶の山にして、庭を隔ち、川を隔ち、家を隔ち、村を隔ち、林あり、寺院あり、岩石ありし白晝の山にはあらざるなり。既にして團々たる月は、山の頂きに半面を出せり。直ちに空に全畫を出せり。更に飛んで雲間に入れり。入つて再び光を放てる時には、聲のみきゝし窓下の枯枝、音のみきゝし庭前の溪流明かに見るを得たり、而してその山の影に忘りたる村、家、林、岩、依然として暗黑々。いかにも塔の澤だ。これを何處にも移すことが出來ない。おそらく三十年を隔てた今でも、環翠樓の樓上から見た山中の寒月の寫生は、これから一歩も出ることが出來ないであらうと思はれる。それにしても思ひ出されるのは、E君かそこに滯在してゐた時――この寒月の寫生は十二月で、その翌年の一月に、私はもう一人の親友と房州に遊んだ。そして洲の岬から白濱へと行つた。それから外房州を廻るつもりであつたが、急に考へが變つて、館山から汽船で浦賀にわたり、横

須賀から汽車で鎌倉に行き、國府津で一泊して、あくる日は小田原から歩いて熱海まで行つた。その時分人車鐵道があつたけれども、學生の身のそれに乘るのを屑としなかつたのである。そして一夜泊つて、あくる日は雪に箱根を越した。その時であつた。私達はもうE君は塔の澤にはゐないと思つた。もうとゝに東京に歸つてゐることと思つた。それに私達の財布は既に輕く、歸りの汽車賃を持つてゐるだけぐらゐのものだつた。『E君がゐれば好いんだが、もうゐないな…。一月には東京に歸つた筈だ。』。ゐれば、金なんか何うかして貰つても好いから、一夜ゆつくり湯に入つて冬の旅の寒さをあたゝめて行くんだがね』こんなことを友達と話しながら、その橋のいくつもある塔の澤の環翠樓の中を覗くやうにして通つて行つた。ところが東京に歸つて來て、E君を訪問すると、まだ箱根に行つてゐるといふことであつた。あとで逢つた時、E君は言つた。

『四日の午前十時頃、あそこを君達が通つたんだね？　えゝと、さうすると、あそこで、橋のところで、子供が二三人で焚火をしてゐなかつたかね？　え？　焚火をしてゐたのを知つてゐる？　それぢや、僕も二階で見てたんだがな……。あの焚火が消えて、子供達がつまらなさうに歸つて

行くところまで見てゐたがな……。勿論、その中ちよつと便所へ下りて行つた。その時、通つたのかな？　君達が――？　惜しいことをしたな。それとわかれば、お互ひに何んなに面白かつたか知れないのになア……。何んなにでも款待して、旅のつかれを慰めてやつたのに――』自分達はその頃はまだ無名の文學書生で、筆から入る收入は一文もなかつたのに、E君はその時既に知名の作家だつたのであつた。それを思ふと、草鞋を穿き、着莫蓙を着た私達が、てくてくとその橋の袂を通つた行つた時のさまが歴々と眼に映つて見えた。

五

今はあるか何うかわからない――或はその前年の洪水のために、假りにさういふ設備をしたのかも知れないが、塔の澤の人家の外れたところに、二三軒小さな溫泉宿があつて、そこから手拭を持つて入りに行くやうなところにその浴槽があつた。

いかにも原始的で面白かつたので、私はそれを『一握の藻』の中にも書き、『戀草』の中にも書いた。それは丁度穴の中にでも入つて行くやうになつてゐて、午後の光線が微かにさし込んでそして微かに顫へるやうに動いてゐた。手拭を持つて來た浴客は、その傍で着物を脱いで、そして潜るやうにして、その中に入つて行くのであつた。一番先にそれを發見したのはS君が海外に行くのを送つてやつて來た時であつたが、謹厳なS君すら『こいつは面白い』などと言つて長い間覗いて見てゐたことを覺えてゐる。

早川の流かその浴槽の外を凄ましく流れて行つてゐるさまなども面白いと思つた。

これが何處か邊鄙なところにあるのなら何でもないが、箱根のやうな設備の整つた溫泉場にあるのも、私の興味を惹く原因の一つとなつたのである。この他に私の入つた箱根の湯壺では、湯本の福住の大きな浴槽が氣持か好かつた。宮の下の奈良屋のも好かつた。塔の澤の川に添つた旅舍の浴槽は、大抵溪流の怒號して流れて行くのを湯に入りながら見ることが出來るやうになつてゐた。

前にも言つたが、强羅にあつた大きな浴槽——それは今はあるか何うか知らないが、そこで頭を湯ぶねの緣に載せて體を浮べて、長い間浸つてゐた時のことは忘れることが出來ない。小湧谷の三河屋の浴槽も綺麗であつた。

それから私の知つてゐる室では、湯本の福住の大きな鷹揚な、何方かと言へば、光線の明るさの足りない室、塔の澤の新玉の湯の早川に面した、安樂椅子の置いてある室、環翠樓の矢張早川に面した大きな室、堂ケ島は、耳も聾するばかりに溪流の怒號がきこえて、ちよつと煩さいやうな感じはするけれども、それでも初夏の頃などには、新綠の底に埋れたやうな心持がして、いかにも印象的であつたことを記憶してゐる。

蘆の湯の雪も私にはわすれかねた。冬は浴客といふ浴客もなく、湯氣のみ白く颯つて、とても都會の人達のやつて行くやうなところではなくなつて了つてゐるけれども、それでも火燵をして、靜かに本でも讀んでゐると、いかにも世離れた感じがした。浴槽の戸をあけて入ると、湯氣が白く、ぼうと籠つてゐて、始めは誰か入つてゐるともわからないのが、次第に白い娘の肌になつて行くのなども、若い心には一種のなつかしさを誘はずには置かなかつた。

ある旅舍では、湯殿の方に行く廊下のところに、大きなたゝきの池があつて、そこに緋鯉が澤山にバクバク喰喁を動かしてゐるの見た。そしてその傍には、筧から綺麗な水が絶えず落ちてあふれてゐるところがあつて、そこに山から採つて來た桔梗や百合などのさしてあるのを見た。またさうしたところに、伊達卷の艶な姿をして、浮世繪の女のやうな女が口を漱ぎつゝ立つてゐるのを見た。

時には靜かで、何とも言はれず好いこともあるが、時にはまた隣で騷がれて一夜眠られずに、ぶつ〳〵言つて歸つて來ることもあつた。今では、箱根の中心が電車の出來たために、上の方に――宮の下、底倉、小湧谷の方に移つて、下の方は次第にわるく俗化しつゝあることは、爭ふことの出來ない事實となつた。湯本などは全く都會の人達の女を伴れて騷ぎに行くためにのみある溫泉場のやうになつて了つた。

箱根に限らず、概して谷に添つた路は、自動車は危險だが――現に、谷に落ちて死んだり何かしたものも澤山あつたが、それでも、箱根の自動車などは、運轉が巧みで、馴れてゐて、さう大して危險を感ぜしめるやうなことはない。山道の折れ曲つたところを合圖の音一つで、下りて來る、または上つて行くのを知つたり知らせたりするさまは、馴れとは言ひながら巧みなものと思はせるに十分だ。しかし宮の下から先は、路はさう大して好いといふわけには行かなかつた。

六

箱根の本宿から鞍懸の裾を通つて、熱海へ、または湯河原へと行く路は、草籔で露が深く、草鞋がけでなければちよつと通れないやうなところであるけれども　旅客は是非一度は行つて見なければならないところだつた。

眺望地點としては、駒ヶ嶽の頂上、神山の頂上などが一番規模も雄大に、視線も濶大されてゐるけれとも――また御厨峠や、長野峠の富士に面したのに對して、二子の半腹や、明星嶽の草地が東に面した眺望を恣にしてゐるけれども、しかし最も變化に富み、最も複雜を極めてゐるのは、矢張、鞍懸から日金にかけての一帶の高原地であつた。そこからの富士は、單獨に獨立して聳えてゐるのに、山と山と重り合つてゐる間から見えてゐるのが面白かつた。それに雲の變化も他に比べて多かつた。そしてその向こうは、狩野川の平野を隔てゝ、丘陵の起伏した中に、碧

い碧い海が見え、更に高く達磨火山群、右には例の天城火山群の起伏をはつきりと指すことが出來た。否そればかりではなかつた。左には一帶に碧い海が見えて、そして碧瑠璃盤上に置かれた置物のやうに、近くには初島、遠くには大島が見えた。三原山の噴烟もそれとさやかに指さゝれた。

日金山――十國峠の名に呼はれた有名な眺望臺は、箱根から熱海へと行く途中にあるが、(湯河原は、その少し手前から左に入つて行くので、自然そこを通つて行かない)初夏の頃はことに感じが好い。鶯と杜宇とが好い聲をして頻りにかけ合ひで鳴いてゐる。新綠が日に光つて、何とも言へないあざやかな色を呈してゐる。

その山の上に、十字形をした廣告柱見たいなものがあつた。私はそこに歌を題した。

秋風の
吹く時、またも
たづね來ん

このむらすゝき
われを忘るな

しかし私はそれからそこに行つて見たことはなかつた。

私は一度は鞍懸の裾から湯河原へと行つた。この路は、十のものなら八つまで草藪の中である。從つて露が深い。午前中は露にしどゝに濡れる覺悟をしなければ、そこは通れない。それに、箱根の方から行けば、ひた下りで、さう大して骨は折れないけれど、湯河原の方から箱根に入つて來るのには、非常に嶮しい。少くとも一里半位は、かなりに急な勾配をのぼらなければならなかつた。

熱海に行くにしても、湯河原に行くにしても、三分の二ほど行くと、いつとなしに里が近くなつたやうな氣がしてなつかしい。階段をなした畠に、黃い蜜柑の鈴生に熟つてゐるのも、ところところに人家が散點していかにも山村らしい趣を示してゐるのも、小さな谷が次第にさゝやかな水の音を立てゝ來てゐるのも、何となしに目的地に近く來たといふことが感じられて嬉しかつ

た。日金から熱海の方へ下りて行く路には、石佛が一町毎に一つづゝおいてあつて、日金の寺に参詣するものゝ道しるべになつてゐる。

日金山
石のほとけの
立つごとに
松をそなへて
われはのぼりぬ

これは、冬枯の時に、私がのぼつて行つて詠んだ歌だ。

詣て來る
人もとだえて
日金山
峠の寺に

雪のみぞ降る

その時のことが思ひ出される。熱海から降る雪を衝いて箱根へとのぼつて行つた時のことが。

掘つても拂つても雪が降り頻つて、峠の寺の壁すらすつかり白くなつて了つてゐた時のことが。

七

小田原から熱海に行く路は、海に添つてゐて、かなりに景色が好かつた。ある人の話に由ると、その規模の大きい小さいはあるにしても、何處かイタリイのナポリに似てゐるといふことであつた。海が思ひ切つて碧く、小さな谷合に蜜柑の黄熟したのが目に附くのなども、さういふ風に南國らしく見える原因のひとつであらう。しかし、風光に富んだ日本の海岸としては、さう大してすぐれたところとも思はれなかつた。眺めがやゝ單調に過ぎて、雲烟の氣に乏しかつた。

小田原から早川の流を渡つて、先づ一番先に旅客の思ひを惹くのは、源頼朝の古戰場として有名な石橋山であつた。そこは丁度秀吉が小田原攻めの時本陣を布いた石垣山の東の突端のやうなところで、今は何も殘つてゐなかつたけれども、それでもこゝで破れて眞鶴まで辛うじて落延びて、そこから安房に渡つた頼朝のことを考へると、遠い歴史のことがありありと眼前にあらは

れて來るやうな氣がした。

眞鶴を近く左に見るあたりに來ると、それでも、海山の風光が次第にその特色を加へて來て、思はす目を瞬はるやうなところがないでもなかつた。此處等に特色な段々畠、そこには冬は蜜柑が熟して、濃い綠の葉に淺い黃い實の球を綴つてゐるばかりでなく、それからずつと一目に長い徒崖が海に臨き下つて、更に遠く濶く海を展開してゐるさまは、旅客の興を惹かすには置かなかつた。そこには江の浦、吉濱などゝいふ美しい漁村が續いた。

門川から湯河原に入つて行く路は、やゝ特色に富んでゐた。山が近いので、嵐氣が饒く、雲が多かつた。平らな路には、小さな川が流れて、そこに水車などが廻つてゐるのが見えた。

そこは何方かと言へば、海の溫泉場としてよりは山の溫泉として見るべきものであつた。何處となく小ぢんまりとした感じがした。それに、そこにある溪流は、さう大してすぐれたものと言ふことは出來なかつたけれど、その平凡なのが却つて旅客の心を落附かせるといふやうなところがあつた。そればかりではなかつた。土地全體が山ふところになつてゐるので、箱根の溫泉な

どに比べて、餘程靜かに、且つ暖かな日影に富んでゐた。何うしても夏よりも冬の溫泉場であつた。

しかし人に由つては、これを猫の額のやうに狹いところだと言つてけなすものもあるであらう。山もさう大してすぐれてもゐないし、湯だつてさう好いとは思はれないと言ふものもあるだらう。しかし、私はさうは思はなかつた。何となしに世離れた、落附くことの出來る溫泉であると思つた。

これに比べると、伊豆山はやかましい賑かな溫泉場であつた。そこでは波の音があまりに枕に近くきこえすぎた。時に由つては、何うしても眠ることが出來ないで弱つた。それに、旅舍の女中の風儀も、何方かと言へば餘り好い方ではなかつた。騷がしい喧ましい氣がした。とても此處では、落附けさうにも思はれなかつた。

相模屋にある千人風呂なども、單に大きくつてめづらしいといふだけである。しかし、地形としては、面白いところであつた。徒崖——それも半ば耕されて段々畠になつてゐる徒崖が、その

ま丶海に落ちてゐて、路かうね〳〵とわるく曲つてついてゐるのなども絵のやうであつた。それも日本畫ではなしに、洋畫に――。

この頃またある人が言つた。『熱海とて名にはきいてゐたが、あんな溫泉ですか？　あんなつまらないところだと思つてゐませんでした。何うして、あんなところが好いんでせう？』

私は言つた。

『しかし、さうばかりは言へない……。あそこは間歇泉――例の一日に一度とか二度とか時をきつて噴出するあの間歇泉で名高いんだから……。日本でも、間歇泉は、あそこと陸前の鬼首の奥の吹上溫泉と二つしかないのだからね？』

『でも、それも、碌々噴き出さなくなつたぢやありませんか？』

『でも出るには出るんだらう？　この間、一方を塞いだら、また、元のやうに非常な勢で噴き出したつて言ふぢやないか』

『でも、溫泉場としては、さう大してよくはありませんね？』

『でも、あれでも一時は榮えたことがあるんだよ。明治の十五六年頃からは、權官や役人達は、熱海でなくつては、溫泉場ではないと言つたやうにして出かけて行つたもんだよ。箱根などの開けたのはもつとずつとあとだよ』

『さうですかね……』

『熱海に伊香保――その時分には、溫泉はこの二つにとゞめをさしたやうに流行つたもんだ……。それも、交通の便があつたわけではなく、乘合馬車や何かではるゞ〳〵出かけて行つたんだからね……。』

『つまり、その時分の人達は、眼がみえてゐなかつたわけですね？』

『それもさうだつたかも知れないが、他の溫泉には、景色が好いところがあつても、その頃は設備が駄目だつたんだね。それが、熱海や伊香保が流行するので、それにつれて、段々設備がよくなつて來た――それで、熱海も名を擅にすることが出來なくなつたんだね』

『それに、肺病患者が多いぢやありませんか？』

『あゝ、さうだ……。それもその衰へて行つた原因の一つだよ。一時それで非常に問題になつたことがあるからね……。肺病患者は困るからな……』

『今でもゐますよ、隨分……』

『さうだつてね』

こんな話が長く〳〵續いた。しかし、熱海にも好いところがないではなかつた。第一にそこは暖かであつた。梅が年内から咲いた。次にあたりが何處となくのんびりしてゐた。伊東あたりの漁村氣分が餘りに饒すぎるのに比べて、此處は全くの溫泉場氣分であつた。何處となくリフアインドされてあつた。それに、生魚が多かつた。避寒地としては、今でも立派に二三の指に上せることが出來た。』それに、君、あそこが元、噴火山であつた形が面白いぢやないか。あの初島が外輪山の殘缺したもので、その前の海中が噴火口だつたんだからねえ……』つゞいて私はこんなことを話した。

小田原から熱海まで。それと相對して、その海上を國府津から伊東まで汽船が毎日航行した。この汽船の甲板の上がまだかなりに特色に富んでゐた。

朝、一番に伊東を出た汽船が、熱海に寄つて、その日の午前十一時半ごろに、あの松の姿の美しい國府津の旅舍のある沖へと着くのであるが、それが、一時間ほどそこにゐて、十二時半頃に、岸から高い波を衝いて漕ぎ寄せる艀から客を乘せて、そしてその白いペンキ塗り色を碧い海の中に際立たせながら、再びその海岸を熱海の方へと向つた。

この汽船の甲板の上からは、足柄、箱根の連山が殆ど手に取るやうに見えた。二子山をはじめとして、駒ケ岳、神山、その右にやゝ離れて金時山、ことに矢倉岳の上はるかに、富士がその屏顏を半分ほどあらはしてゐるさまは、たしかに『富士百景』の一つとして十分に價値のあるものとしなければならなかつた。それに、國府津を出て二三里ほど來たところでは、右に丹澤山塊の深い山巒をある程度まではつきりと指すことが出來た。

眞鶴の岬は、殆どその鼻を掠めるばかりにして通つて行つた。そこには岩石が錯落としてゐた。

低い祠や小さな華表の立つてゐるのなども見えた。岩の上に立つて長い釣竿を弄してゐるものなどもあつた。海水浴の旅舍のあるあたりも、そこからさう大して遠くないらしく、大きな鍔の麥稈の海水帽をかぶつてゐる女達も二三そこらを歩いてゐるのを見かけた。

海から見ると、伊豆山も熱海も全くその趣を異にしてゐた。伊豆山權現の社なども、陸地からでは、さう大してはつきりとは見えぬけれども、その甲板の上からは、殆ど全く掌に指すがごとく眺められた。熱海の人家の參差して高く連つてゐるさまも、旅客をして全く別な港に來たやうな心持を抱かしめるに十分であつた。汽船はやがてそこを出て、初島を左に見て、そして伊東へと向つて航行した。

伊東は近年非常に開けた。土地の値なども、十年前と比べて。十倍にも十五倍にもなつたといふことであつた。今では旅舍の設備もかなりによくなつて、都會の人達を引寄せるにも十分とまでは行かなくとも、先づ七分通は不自由を感じなくなつたといふことが出來る。無論、熱海のやうにわるく貴族化してゐない。安くゐやうと思へばいくらでも安く滯在し得られる。それに魚類

も豐富である。

熱海と伊東との間には、大きな峠があつて、陸上の交通は今も不便である。軌道が出來るやうなことも言はれてゐるけれども、容易に出來ない。それに、道もわるい。自動車も車も樂に通るといふわけに行かない。從つて、伊東に行くには、何うしても海上の交通に頼らなければならなくなる。

東京から行くには、靈岸河岸を午後に立つ汽船に頼るのが一番便利である。これならば、賃錢も安いし、一夜ぐつと寢さへすれば、明日の朝は早くも伊東に着くことが出來る。しかし、船に弱い人は駄目である。何故と言へば、この航路はかなりに荒く、場合に由つては、船の中を立つて歩くことが出來ないくらゐのしけにはよく出會すからである。次には前に言つた國府津から正午に出る汽船——これはそんなにひどくない。荒れたところで、高が知れてゐる。その次は、陸を大仁まで行く。これは自動車も通る。しかしいかにしても迂廻路するやうな氣がした。

八

伊東から出したある人の手紙を此處に引く。

手紙の一

成程散漫な感じのするところですね。ちつとも溫泉場らしくない……。私のゐる家などは、何う考へても普通の旅舍ですね。

しかし空氣は好い。たしかに好い。それに何處となく落附かれるやうな氣分になるところですね。昨夜は町をあちこちと歩いて見ました。繪葉書などを買つて來ました。その中に、大島の女達の繪葉書がありましたが、それを見てゐる中に、何となく大島へわたつて見たくなりました。で、旅舍の主人にきいて見ると、便船がないこともないさうです。都合よく和船があれば、一夜で行き着くことが出來るさうです。大島へは、此處から行くのか一番近く、直徑にして五

六里しかないさうです。

島の話をいろいろときゝました。今ではそれでも餘程内地化したさうですけども、それでも昔のまゝの氣分が島の全體に行きわたつてゐるさうです。何しろそこには明治の維新も何もないのですから、太古時代からそのますに穩かにつゞいて來てゐるのですから……。

それに、今日、隣の室の學生から、この先の海岸の話をきゝましたが、何でもこれから下田の方へ出て行く路には非常に好いところがあるさうです。丁度天城火山群の東麓を掠めて行くところで、一日も二日も海中の大島を見つゝ旅をするといふことでした。稻取といふところなど好いところださうです。河津といふところは、河津三郎の出生地ださうですが、そこにも溫泉があるさうです。この土地には、伊東祐親のあとがありますが、ひまにまかせて、源平時代のさういふ人達の址をさがし廻はるのも面白いと思ひます。

手紙の二

たうとう便船があつたのを幸ひ、大島に渡つて見ることになりました。昨夜おそく港を出て、

帆柱の下の帆布のところにどてらや毛布をかけて寢ましたが、海上は靜かで、別に波濤にゆすり起されもせず、舷側に當るさゝやかな波の音を夢現の中にきゝながら、今朝、目が覺めると、もはや島の岡田村近く來てゐました。いくらか空が曇つてゐて、頭の上で帆布がバタバタといくらか濡れた音を立ててゐました。何とも言はれずなつかしく、ロマンチックな心持がしました。これから岡田に行つて、朝飯を食はうと思つてゐます——。

かうした手紙がまた三通も四通もある。しかし、それには主として大島のことが書いてあるので此處には省略するが、その伊東から和船で大島にわたつて行つたさまがいかにも私には羨しく感じられた。朝早く帆布のパタパタとした音に眼をさました條なと、私には『詩』を思はせずに置かなかつた。

九

一月の三日か四日であつた。私は子供を伴れて、沼津から電車で三島へとやつて來た。海を渡つて土肥に行かうとしたのに、今日は正月で、午後の汽船は出ないといふので、やむなく計畫をあらためて長岡へと志した。

電車も汽車も非常に混雜した。立往生どころが、入つたが最後、出ることも動くことも出來ないやうな有樣であつた。それをやつとのことで、伊豆長岡まで來て汽車を捨てた。

私達はほつと呼吸をついた。

私に取つては長岡は生面の地であつた。近時非常に名高くなつたので、そんなところがあるかしら？　などと思つて、五萬分の地圖を探して見たりしたが、一度は是非行つて見たいと思つてもゐた。私達は靜かに歩いた。

汽車からまだ一里以上もあるさうで、その間を乘合自動車や馬車や、俥で連絡を取つてゐるが、その往來の頻繁であることは、實に驚かるゝばかりであつた。あとからあとへと自動車がブ、ブと音を立てゝやつて來た。つゞいて喇叭を鳴して乘合馬車がやつて來た。そのあとから俥が二臺三臺と客を乘せて來た。そしてその客達は、皆な長岡へ行くのだといふことであつた。

今は修禪寺と長岡とが互ひに競爭するやうな形になつて行つてゐるのを私は感せずにはゐられなかつた。

停車場から七八町ほど行くと、そこに橋があつた。それは他でもなかつた。伊豆の平野を流れて沼津に行つて海に入つてゐる狩野川であつた。私に思はず立留つた。何故かと言ふに、それはその川が非常に印象的であつたからである。非常に靜かでそして美しかつたからである。それは或は時が好かつたのかも知れない。平凡な時に見たならば、平凡な川であつたかも知れない。しかし、その時は、午後四時過の日影が斜めに明るくその岸の淡竹の藪にさし添つて、更にそれが清淺な影の濃い水面にキラキラと光つてゐて、何とも言はれない靜けさを私の心に染み込ませ

た。それに、深く入り込んで來てゐる丘陵のさまが、一種言ふに言はれないなつかしさを私の胸に誘つた。

『好い川だな！』

こんなことを獨りで言ひながら、猶ほじつと立盡した。

こゝでは最早大仁から修禪寺に行く途中で見るやうな、あゝした激湍も深潭もなく、全く上流の若々しさから中流らしい靜かな靜かな潺湲に變つて行つてゐた。その微かな音も何となくあたりに相應してゐるやうに私には思はれた。

それから一田圃越して、小さな丘陵に突當つた。そこには昔からきこえてゐる、長岡溫泉などの發見されない以前からきこえてゐる一つの溫泉があつた。それは言ふまでもなく、吉奈溫泉であつた。旅舍が一軒が二軒さびしさうにそこに立つてゐた。しかも街道を通つて行く自動車や、乘合馬車や、車や、さうしたものは、一人の客をもそこに落さずに、皆な長岡へ！　長岡へ！と向つて駛つて行つて了ふのであつた。それは湯が少く設備がわるいのだから驚ろかないと言へ

ば駕方がないが、吉奈溫泉の方では、庇を借して母屋を奪はれたやうな心持かするであらうと思はれた。

停車場から吉奈まで三十町、それから長岡まで更に十二三町あつた。次第に丘陵の中に入つて行くやうな感じかしたと思ふと、突然そこに一別天地がひらけて、丘と丘との間に、新しい家屋や、別莊や、旅舍や、瀟洒な庭や、庇を並べた商店などが續々としてあらはれ出しで來た。丘の畠には、蜜柑の黃いのがをり〳〵美しく點綴せられて見えた。

『はゝア、こんなところかな……長岡ッて？』

こんなことを言ひながら私は歩いた。突當るやうになつて、更に右に折れると、そこは溫泉の中心らしい町で、旅舍が旅舍につゞき、商店が商店に續いて、一種賑やかな、いかにも溫泉場らしい巴渦をあたりに漲らせてゐた。何となく小さつぱりした感じがすると共に、猫の額のやうなところだ！　といふ氣もした。

但し非常に溫かいところではあつた。成ほど避寒地としては、山の中で風は吹かず、霜は置かす、雨も斜めには降らないといふ長所があつた。それに、海も近く——三津まで三十町ぐらゐしかないので、オゾンの交つた海の暖かい空氣は、絶えずこの丘の中まで入つて來た。

『さうですな……。ちよつと好いですな……。小ぢんまりしてゐますな。丘と丘との間に挾つてゐるやうな形も好いし、海の近い形も好いし、富士の雪の山と山との間から見えるさまも好い……。しかし、要するに、小さな溫泉で——たとへて見れば、修善寺が大きな、ちやんとした料理店ならば、此方はしやれた氣のきいた小待合と言つたといふやうな氣がしますな……』

私はあとでこんなことをさまざまな人達に話した。

それに惜しいことには、そこは湯が少なかつた。その點に於ても、とても修禪寺の老舗に比ぶべくもなかつた。

私はそこに一夜泊つた。それは蜜柑畠の丘と相對してゐるやうな、またはそこから下りて來る細い路がうねうねと曲つてその旅舍の下の勝手に入つて行くやうな二階の六疊の一室であつた。庭木は藁で包まれてあつた。

『これから江の浦にお出でになるなら、三津の方に出ては損ですよ。それとは反對に、北條の方を通つて行く路がありますよ。それを行けば、どうしたつて一里くらゐは近い』三十二三の番頭はかう言つて私に敎へて呉れた。しかし、私は三津が見たかつた。三津からずつとその海岸を通つて江の浦から沼津の方へと出て行きたかつた。

で、あくる日は、私達は海岸の方へと出て行つた。それは丘と丘との間に、小さな野が展けて、その向うに眞白の富士が見えるやうなところだつた。落葉のガサガサする林や、枯れた萱に朝日のさす野などがあつた。二十二三町で、丘に突當つた。

そこに隧道があつた。

それを出ると、すぐ海が見えた。碧い、碧い海が。帆が一つ靜かに浮んでゐる海が。いかにも漁村らしい參差とした屋根を前景に持つた海が――。『ヤア、』かういかにも喜ばしさうに言つて、子供達は走つて下りた。

三津の海岸はちよつと好かつた。深く彎入した江の浦灣の副灣を成してゐる形と、達磨火山群

の一支脈が長く海中に落ちてゐる形とが、一種他に異つた景をつくつた。私は地圖を展げて見た。そこから海岸路を戸田の方へ行つたら、それこそ何んなに面白からうと思つた。私はその高い峠の方を仰いだ。

しかし、この海岸は風が寒かつた。耳も切るゝばかりであつた。景色は好かつたけれども――島などもあつて、決して凡ではなかつたけれども、仔細にそれを味つてゐることの出來ないほどそれほど強く寒く風が吹いた。

三津から江の浦まで一里、これから江の浦に入らうとするところに短かいトンネルがあつて、そこから番頭の言つた路が長岡の方へとわかれて行つてゐた。沼津から自動車で來ると、この道を右に折れて長岡へ入つて行くやうになつてゐた。

江の浦は全くの漁村であつた。他の奇もなかつた。しかし、この村を離れて、小さな鼻をぐるりと廻ると、よく繪葉書や寫眞で見る靜浦の富士――愛鷹を臣下にして屹として立つてゐる東海第一の富士がさながらこれを掌に指すがごとく見わたされた。そこに來ては、誰でも聲を擧げず

にゐられなかつた。

『好いな！』

『何とも言はれないな！』

流石はきこえた靜浦の富士だ！　といふ氣が私にもした。それにその前景を成してゐる海と岩とが丸でなかつた。波濤の掀翻もかなりに美しかつた。

その鼻から沼津まで、この間は全くこの富士で――富士の雪で彩られてゐると言つても決して差支なかつた。あまりにすぐれてゐない松原も、汚ない一本筋な靜浦の町も、ところどころに熟してゐる密柑畠も、小さな橋のかゝつてる里川も、何も彼も皆なこの富士の爲めに光彩を着けた。中でも沼津近い明るい街道の上で見た富士の雪は殊に鮮かであつた。

十

沼津の狩野川の岸から、下田に行く汽船が毎日二回出て行つた。

この汽船の航路は非常に好かつた。旅客の是非一度は通つて見なければならないところであつた。しかし冬は波濤が高く、かなりの難航路で、現に一二度その汽船が沈沒したことなどもあるから、旅客は餘程注意を拂つて、いくら天氣が好くつても、風の強い日などにはあまり乘らないやうにする方が好かつた。

この汽船は江の浦へは寄らずに、眞直に戸田から土肥に航した。

この戸田は、伊豆の西海岸では、一番すぐれた海水浴場のあるところで、帝國大學の水泳場もたしかそこにあつたと記憶してゐるが、更に面白いことは、曾て德川の末年に、ロシアの帆船がこゝで沈沒して、何うしても歸ることが出來ず、止むなくそこで外國型の帆船を造ることになつ

た。それを當時の造船界では、非常にめづらしいことにして、わざ〳〵そこまで見學に行つたものだつた。現に、そこに行つて、始めて外國式の造船を覺えたといふその道の大家などもある位であつた。從つてこの戸田は、造船學發祥の地として、非常に重い紀念のあるところとして學者達から見られてゐる。

夜おそく町から舟で、その海水旅館のある長い半島にわたつて行つたことを私は忘るゝことが出來なかつた。

月がキラキラと金屬性の破片のごとく美しく波の上に碎けた。

『まだ、寢やしないだらうな？』

『大丈夫でさ？』

『もう、しかし十時すぎぢやないか？』

『なあに、寢たら、起しますから、心配ありませんよ』

それはいつもその半島の旅館と町との間の用事を足して、船頭もすれば客引もするといふ平藏

といふ男であつた。艫の音は靜かにあたりに響きわたつた。

平藏は言つた。

『今日は何處から來たね？　旦那？』

『松崎から？』

『歩いて來たかね？』

『さうさ……。車なんかありやしないよ』

『でも、えらいな、旦那。松崎が此處までゝは餘程あるぜ！　十二三里、もつとあるべい…。それに峠もいくつもあるぢやねえか？』

『おゝも歩いたことがあるかね？』

『俺ら、十七八の時、歩いたきりだけれどもね！』

『しかし、今日歩いたところには、好い景色のところがあつたぜ！』

かゝ言つて私はそれを靜かに心にくり返した。江奈の北、由流木橋の藥師堂の下にある大きな

洞窟！　波濤が凄まじくやつて來ては忽ちそれに當つて碎けるさまは實に何とも言へなかつた。何でも、この洞窟は、今だに世間には知られぬけれども、波濤の靜かな日に、舟で仔細にそこを探ると、何とも言ふに言はれない奇觀があるといふことであつた。それから杉阪峠を越して田子の村、そこには大きな灣かひらけて、一つの大きな岩礁がそこに高く凄まじく欹つてゐるのを私は目にした。それは田子島といふのであつた。それからまた阪にかゝつて、半里ほどでその上に着いたが、そこはこの海岸の中でも、殊に展望に富んでゐると言はれてゐる田子阪の峠で、富士を中心に、對岸には薩埵、久能の山々、三保の長岬、遠きは蒲原、浮島あたりから、近くは土肥、宇久須あたりまで、全く一眸の中に集つて來て、その規模の雄大なことは、とても東海道沿岸の比ではなかつたことを繰返した。

安良里からまた峠にかゝり、やつと一つ越したと思ふと、また一つ、また一つといふ風に峠が出て來て、山下田の沙濱まで出て來るのは容易でなかつた。でも、やつとそこまで來た。土肥はもうぢきだ。かう思つて私は急いて歩いて來た。

『土肥の穴の湯には入つたかね？』

平藏は艫をあやつりながら、かう言つてきいた。

『入つた！　入つた！』

『ちよつと面白いだらう？』

『さうだな、ちよつと面白いな』

それは土肥の村から十町ほど東北に偏つた小さな丘の果のところにあつた。そこには古い寺があつて、その傍に洞窟があつて、湯はそこから湧き出してゐた。着物をそこに脫いで、好奇にそこに浸つて見たことを私は思ひ出した。

『段々入つて行くと、急にあつくなつたんでびつくりしたよ』

『元のところは、あれでかなりに熱いんだよ』

『面白い湯だな』

その湯の奥は六十間くらゐ、段々狹くなつて、あたり一面に湯氣が漲つて、丸で蒸風呂か何か

のうやであつたことをも私はくり返した。

『それよりも、土肥から此處まで來る間がつらかつた？　あの舟阪の峠の上で、日が暮れちやつたでな……』

『ちよつとこわいでな、あそこは？』

こんなことを話してゐる間にも、舟はキラキラと美しい月の光を碎きつゝ靜かに進んだ。半島の岬の松林の黑いのが次第に近く近くなつて行つた。

『このころでも、保養館には、お客はあるかね？』

『あんまりねえな』

『矢張、冬は駄目かな』

『夏場だでな』

『その代り、夏で一年の生計を取つて了ふやうなもんだな……』

『まア、さうだな』

やがて船は御濱に着いた。で平藏と一緒に松林の間を通つて、保養館に行つた。幸に去年來た時に知つてゐるお糸さんがまだゐて、『まア、こんなに遲く……』と言つて迎へて呉れた。

戸田の海水浴場は、大學の遊泳場となつてゐるために、貴族的な設備は出來てゐないけれども——また夏は混雜してしやうがないけれども、十月の初旬頃に出かけて行くと、ちよつと靜かで好かつた。修善寺から山越しに行く路は、五里ほどあつて、峠がひとつあるけれども、さう大して嶮しいといふほどでもなかつた。

沼津を午前七八時と午後一時頃とに發する汽船は、百噸くらゐの小さな船で、風のある時などには、かなりに強く動搖した。海舞鶴と宮津とを連絡する汽船ぐらゐにはたしかに搖れた。狩野川の河口から次第に沖へ、やがて深く灣入した江の浦灣を左に見て、達磨火山群の一角の海中に落ちたところを目標にして進航するのであるが、西風は横波を揚げるので、船の左右動はかなりに烈しかつた。海はさながら鼎の湧くがごとくに掀翻した。

戸田に來ると、いくらか波は靜かになる。半島の岬を右に見て、船は松林と並行したところま

で行つて停船した。蛇は町から遠くやつて來た。

戸田から土肥までの海もかなりに荒いが、しかし、江の浦灣を左に見た、難所ほどではなかつた。次第に富士がはつきりして來た。此處等あたりから見ると、何とも言はれないほどあざやかであつた。それに、田子の浦の長い沙濱からかけて、薩埵の低い山脈の靡いてゐる形が好かつた。つまり東海道の汽車の蒲原あたりで眺めた山巒の下のあたりの海を、その汽船は航行して行くのであつた。私は土肥に行つて下りた。

土肥は溫泉町とは言へなかつた。漁村——全くの漁村だ。旅舍も二三軒はあるけれども、さう大してすぐれてゐるとは言はれない。それでもその穴の湯を遠くから引いて、内湯はどの旅舍にもあるけれども、田舍の人達が華客であるだけそれだけ、伊豆の中部地方にある溫泉——たとへば修善寺とか、長岡とか、湯ケ島とか言ふやうな都會人の溫泉らしい氣分は少しもなく、海と山とがさうした繁華から全くその土地を離して了つたやうに見えた。

十一

狩野川の谷——即ち伊豆鐵道の駛走してゐるところは、こゝらでも最も古い歴史を持つてゐるところであつた。先づ第一に、有名な官幣大社三島神社がそこにあつた。次に賴朝の配流された蛭ケ子島がそこにあつた。また北條氏の出身地がそこにあつた。その他、賴朝に隨つて中央部にその威名を轟した人達が多くそこから出た。

その谷はいかにもよく耕作された豐饒な土地で、丘が長くその東を劃り、西からは暖かなオゾンを雜へた海の空氣が濃やかに入つて來た。そこには梅が早く咲いた。蜜柑の黄い實が濃い綠の葉の中に美しく熟した。汽車で行くと、三島の少し先きの驛、左の山の裾に畑毛溫泉があつた。そこにも好奇に出かけて行くものがあるが、それは田舍の溫泉で、さう大した設備を持つてゐなかつた。北條あたりで左の山際を見ると、そこに、例の江川太郎左衛門の遺址である反射爐が

あつた。そしてその向うに、丘の裾につくやうになつて、秀吉の持てあました韮山城址とその町とがあつた。次第に汽車は平野から丘陵の中へと入つて行つた。

伊豆長岡から大仁までの間は、汽車は絶えず狩野川に添つてゐて、をり〳〵は深潭もあれば、激湍もあり、また潺湲として流れた淺瀬もあるといふやうなところであつた。此處では、丘陵が既に深くなつて來てゐるので、最早今までのやうな野の氣分を味ふことは出來なくなつてゐた。嵐氣もかなりに饒かつた。

大仁は小さな停車場ではあるが、しかもいつもゴタ〳〵と混雜してゐた。何故といふのにこはこの地方の中心點を成してゐると共に、修善寺へ、湯ヶ島へ、古奈へ、更に遠く伊東へと赴く溫泉客が皆な此處で乘つたり降りたりするからであつた。そこには自動車もあれば、馬車もあり、また俥もあつた。遠く天城を越して下田まで行く乘合自動車さへあつた。

修善寺はこゝからいくらもない。一里半位のものである。歩いて行つても、さう大して骨の折れるところではない。少し行くと、桂川が右から流れて來て、狩野川に合してゐる。そこには水

車などがかゝつてゐる。右して桂川の谷に添つて行けば、修善寺、左すれば伊東、眞直に狩野川に添へば、それは天城街道で、ずつと下田まで眞直につゞいて行つてゐるのであつた。

此處のところ——この追分のところから南を望んだ形は、ちよつと好かつた。天城火山群の連峰に白い雲がふわ〳〵と湧いて、それに日が照つて、その下に眞直に街道の通してゐるさまは、私の心を引寄せずには置かなかつた。もう此處等は、全く山の中といふ氣がした。

修善寺はこの桂川に添つて、ぐるりと弓弦を張つたやうに入つて行つたところにあつた。半は山の裾、半は溪の畔と言つたやうな感じのするところで、長岡溫泉に見るやうな、野の感じ、野から始めて丘の中に入つたといふやうな感じは、最早此處では全く見ることは出來なくなつてゐた。何方かと言へば、全く萬山の中に入つて來て了つたやうな氣分であつた。

溪を跨いで、二層三層の旅舍がその兩岸にある。いかにも古い溫泉場らしい感じがした。ことに、これが鎌倉時代から湯の町として榮えてゐて、賴家や範賴の最後の址が今日までもちやんと殘つてゐると思ふと、一種變な、不思議な氣がした。

くさめくさめ
くさめする日の
おのが身を
うはさやすらし
妻ら、子供等

これは修善寺に一人で長く滯在して、退屈しつゝ田舍の妻子のことを思つて詠んだ歌だ。その人の言ふのには、『成ほどそこは胃腸には好いらしい……。僕は腹膜炎の豫後に行つたのだが、一月ほどですつかり治つた。しかし、ひとりで行つてはさびしくつてしやうがないとこだね。女とでも一緒に行かなくつては、とても長くゐられないね。ほつんとして一日口もきかずにゐたことも幾日もあつたよ。三味線を彈く人達もゐるにはゐるけれどもね。一人ではね。君でもゐれば、出かけて行つて見もするけれども……。何だかひとりでは具合がわるいからな……。爲方がないから、五發五錢の空氣銃をよく當てに行つたもんだよ。猫の額のやうなところだからね、長くゐ

ると、しまひには行つて見るところも何もなくなつて了つてね……。隨分退屈したよ』

『あそこきりかえ？　何處にも行かなかつたのかえ？』

『病後だからな』

『それぢや退屈するな。……せめて湯ヶ島までも行つて見れば好かつた』

『湯ヶ島は好いかね？』

『ちよつと景色が好いよ』

『峠を越して、戸田の方に行かないかつて、隣の學生に誘はれたけれども、五里もあるつていふからね』

『あの道も好いな』

『何でも富士を見るのに、非常に好いところがあるさうだ……。歸つて來て、激賞してゐたつけ……。あの富士を見ては、もう他の富士は見ても見たやうな氣がしないつて言つてゐたつけ…』

『その峠の上から見たんだよ。實際好いよ。行つて見れば好かつた！』

こんな話をしたことを私は思ひ起した。つゞいて岩野泡鳴の書いた『空氣銃』といふ作を思ひ出した。

修善寺は冬は寒く、夏は暑いところであつた。避暑地としても、避寒地としても、餘り適當してゐるとは思はれなかつた。冬の溫泉場としては、長岡に押されるのも無理はなかつだ。

例の追分から、天城街道をたどつて行くと、その感興は全く別になつて來た。山はいよいよ深く、溪は益々細い。家屋の構造なども、全く山國風になつて、庇の深い、石を載せた屋根が多くなつて來た。自動車も通るには通るが、あまり安心してはゐられないやうなところが往々にしてある。

青羽根といふところがあつて、そこから右に入ると、一里に近く、古奈溫泉がある。またその近くに何とかいふ溫泉がある。共に田合の溫泉ではあるが、安く滯在しやうとするものには好いところである。

狩野川の溪谷は益々細くなつて行く。ところに由つては、暫らく立留つて眺めて行きたいやうな激湍が處々にある。橋をわたると、湯ヶ島の村だ……。

此處は溪として非常にすぐれてゐる。ことに、落合樓といふ溫泉宿のあるところが最も好い。そこに行くには、街道で自動車を見捨てゝ、溪にかけた吊橋をわたつて行く。對岸の樫の綠葉の中には、その瀟洒な旅舍の二階、三階が隱見して、いかにも好い感じを旅客に誘つた。

それに、此處に來ると、天城がもう非常に近い。殆どその翠微が眉を壓するばかりである。ことに、湯ヶ島川が此の少し下で狩野川に合してゐるので、水聲がこの狹い土地を取卷くやうにしてきこえた。

十二

『天城の谷は大きいですね？　あんな立派な渓谷とは思はなかつた』

かうある青年がさもとも感嘆したやうにして言つた。

『いつ行つたの？』

『ついこの間――その旅から歸つて來たばかりです……。實際、あんな好いところとは思はなかつた』

『此方から行つたのかね？』

『いゝえ、下田の方から來たんです……。峠から此方の方が好う御座んすな……』

『つまり、湯ヶ島の方からのぼつて行くところだね？』

『さうです……。あの峠附近の雄大な感じは何とも言へませんでした』

『さうだね。ちよつとないね。あの位の大きな感じのする谷は？　それに杉や檜の林相が見事ぢやないか？』

『本當ですな……。あの杉や檜の綠の色の美しさと言つたら、とても東京の近い山では、あんな綠色は見られませんね……』

『本當だね』

『私は初め馬鹿にしてたんですよ。天城なんて小さな峠だなんて思つてゐたんですよ。ところがあんなに美しいとは全く思ひもかけなかつた。箱根八里の溪谷なぞよりも何んなに大きくもるし、美しくもあるか知れませんね？』

『それはさうだ……。箱根の舊道は、さう好くはないからな』

かう言つたが、私はその時のことを思ひ出して、『あの峠のところの、岩窟のやうなところにある家はまだあるかね？』

『御座います……』

『あそこで雪に降りこめられて、弱つたことがあつたよ』

『あんなところで』

『湯ケ島を出かけた時には晴れてゐたんだが、途中から雪になつてね……。しかし、峠を下りて少し行くと、晴れたには晴れたけども——』急に話頭を變へて、『あそこを自動車が通るのかね？』

『え、通りますよ』

『あぶないもんだね。ちよつと間違へば、深い谷の中に落ちて了ふぢやないか。乘つても乘つてゐる氣がしないだらうね？』

『でも平氣でやつてゐますよ。乘客もありますよ』

『さうかな……それであやまちもないかね？』

『ないんでせう、屹度……。そんな話もありませんでした』

『さうかな』

私の眼にはその折れ曲つた深い谷を自動車のぐるぐる廻りながら通つて行くのがはつきりと映つて見えた。

『だから、宮内省あたりでも天城に獵に行くんですね。あそこには、獸はまた隨分ゐるでせう？』

『猪は大分ゐるね』

『斧の入らないところだつてあるでせうな？』

『それはあるだらう？　君は知つてゐるか何うか知らないが、あの峠があれで天城火山群の脈の一番凹いところで、あれから天城の頂上までは、また五百米ぐらゐあるんだよ』

『あの近所から登るんですか？』

『あれから二十町ほど下に、村があるね？』

『え、え……あります。半鐘臺などの立つてゐる……』

『さう、さう……。あそこからのぼつて行くんだ。さう大してひどくはないがね。大抵密林でね。あんまりのぼり好い路ではない。頂上もさう大して展望が好いといふほどではない。實際、

火山でも天城火山群ほど頂上近くまで密林で蔽はれてゐる山はないからな』

『先生は、伊豆の東の海岸を御通りでしたか？』

『汽船で通つたには通つたが、歩いて見たことはないね』

『あそこは好う御座んすね？　天城火山群を見るには、あそこが一番ですね。大室、小室、矢筈などといふ山の横を掠めて通つて行くんですから――』

『伊東の方から行つた？』

『さうです？』

『伊東を出て、何の位行くと、海岸になるね？』

『さうですね、海岸に出るには、餘程行かなくてはなりませんね。八幡あたりまで行かなければ――？　しかし、あの海添ひの高原――あのひろびろとした高原――あの感じは何とも言へませんな……。それに、大島が近い……。すぐ眼の前にある。あそこを旅行すると、毎日毎日大島を見ない日はありませんな』

『西海岸の富士と同じわけだね？』

『さうです、さうです、それに稻取も面白いし、河津も面白いですよ。谷津に溫泉があります が、田舍の溫泉ですけども、ちよつと感じが好う御座います。それに安いですよ。一日一圓五十錢くらゐでゐられますよ』

『それは安いね……』

『概して天城の手前と向うとでは、大變な違ひですね。一度向うに越したものは、此方の溫泉なんかに留つてゐる氣はありませんね。向うの方が何んなに淳樸で、親切で、居心地が好いか知れやしませんもの……。谷津だつて、湯ケ野だつて、蓮台寺だつて、それから下田の少し手前の溫泉たつて、好う御座んすからな……』

『それはさらだらう？　君達には――？　しかし、都會の人達には、あゝいふ溫泉にはとても入れないからね。矢張、都會の人達には。都會の人達の入るやうな設備かしてなくつては駄目なんだよ』

『それはさうでせうな』

こんな話は長く長く續いた。

十三

谷がある。丘がある。谷には潺湲として水が流れてゐる。丘には段々畠があつて、麥が青くなつてゐる。そしてその谷に添つて街道がつゞき、人家が歴落として散在した。

この街道は下田に行くのであつた。天城の大きな谷に添つて次第に下りて來たのであつた。旅客はそこに何とも言はれない靜かな空氣を感ずるであらう。冬ならば、天城の北と南とではかうも違ふかと思はれるほどそれほど溫暖な氣候を感ずるであらう。野椿の花がその綠葉の中に一面に咲いてゐるのを認めるであらう。また、到るところの畠に、谷に、黃熟した密柑やオレンヂや橙を認めるであらう。そしてこの街道は湯ケ野の溫泉のあるところから、一度河津の谷に下りて、(谷津の溫泉はそこから近かつた) そこからまただらだらとのぼつて、河津や谷津の人家を今度は對岸に、下に見て、そして海のどよみの美しく展開されたところへと出て行くであらう。

そしてそこからは、海中に高く聳えた大島と、その島根を白くめぐつてゐる波濤の美しさとを見ることが出來るであらう。そして路は猶ほ續くであらう。林の中に入つて行くだらう。次第に下り道になつて行くだらう。平和な、靜かな村へ村へと續くであらう。そして最後に下田の町を塞ぐやうにした獨立した山と、古いさびしい町と、深く徒崖の中に入り込んだ衰へた港とを發見するだらう。

湯ケ野で、私達は遲い晝飯を食つた。かなりに腹が減つてゐたにも拘らず、いかにも硬い鷄肉なので、何うすることも出來なかつたことを覺えてゐる。またちよつとの間で、そこの湯に浸つたことを覺えてゐる。丁度午後二時すぎの日影が、川向うの丘の方からさし込んで來てゐて、あまり明るすぎて弱つたことを覺えてゐる。赤い、青い、黃い硝子窓のわるくけばけばしく光つてゐたことを覺えてゐる。

一度下田に入つた路は、今度は右の方へと出て行つた。蓮台寺の溫泉はそれから三十町ほどで、丘の下のやうなところに旅舍が陸續として連つてゐた。田舍の人達のあそぶところなので、かなり賑かでもあり、喧しくもあり、泊つても、隣の間で騷がれて一夜眠られないやうな眼に逢はないとも限らないやうなところであるけれども、それでも一度は行つて見ても好いところであつた。

下田から西海岸の松崎までは、馬車も通へば、自動車も通つた。路もさう大してわるくない。しかし、こゝまで來た旅客は、そのまゝ松崎の方に出て行つて了ふのは殘念であつた。何故なれは、長津呂にある石廊岬は、天下の絕觀であるからである。

長津呂に行く路は、下田から二三里行つたところで、松崎の方へ行く路と二つにわかれた。行くにつれて、その路は次第に海に近くなつて行つた。忽ち蜃氣樓かと思はれる光景が眼に映つた。

『お、海、海！』

『碧い海だね、何とも言へない色ぢやないか？』

暫し行くと、今度はその碧い海の上に灰色をした島のやうなものが横つてゐて、そこに矢張これも灰色の高い燈臺の立つてゐるのを目にした。

『あれは？』

『あの島は？』

『あれが神子元島の燈臺でさ』

かう乘合馬車の車掌は言つた。

『はゝア、あれが神子元島かえ？　小さな島だね？』

『何しろ岩礁ばかりですからな……。地面といふものは少しもありませんからな。食ふものは皆な内地から運ばなければなりません。だから、暴風雨のつゞく時なんかには困りますよ。海が荒れて舟が出せなけりや、そこにゐる人は乾干にならなけりやなりませんからな』

『しかし、滅多に、そんなことはないだらう？』

『でも、一年に一度くらゐは、さういふことがあるさうですよ。この間もその話が東京の新聞に出てゐました。』

旅客はいろ〳〵な思ひに撲たれずにはゐられなかつた。かれ等はじつとそれを見詰めた。しかし、さうしたシインも忽ち消えてなくなるであらう。また、田舍道へとつゞくであらう。所謂伊豆石を乘せた駄馬が何疋も何疋もボタボタと白い塵埃を立てゝ通つて行くだらう。行つても行つても平凡な田舍で、海も容易にそのかゞやきを示さぬであらう。しかし手石までは決してさう遠くはなかつた。

手石には彌陀窟がある。『東遊記』の中にも書かれて、かなり旅行家の憧憬の的となつてゐるものであつた。しかし、少しでも海があれてゐては、舟が出ない。從つて現に見たといふものが尠ない。私なども汽船の上から見ただけであつた。

手石から長津呂までの間に、一ところ非常に好いところがあつた。それは恐らく立派な名勝としても決して他におくれを取らないやうなものであつた。そこからは、八丈を除いたあらゆる伊豆の島々が見られた。大島、三宅島、新島、利島――すべて一目に。すべて碧い海の上一列に……。

その濱の長さは十町乃至十五町であつた。そこには暖かく日の當つてゐる漁村があつたり、女達の集つて水を汲んでゐる井戸があつたりした。

私達は眺めては歩き、歩いては眺めた。

『それでも、此處は南のはてといふ氣がするね……』

『本當だ……。こんなところがあるとは思はなかつた……』

『今日はいかにも、海が靜かだね。風といふ風はちつともないぢやないか？　あの帆を見たまへ、ちつとも動かない……』

こゝから路はまた峠へとかゝつて行つた。上つたり下つたりした。碧い海に日が深くさし入つて、何とも言はれない色彩の變化を見せた。『あの色が出せるだらうか？　また出したところで、繪になるだらうか？』こんなことを話し合ひながら私達は歩いた。

長津呂は徒崖の中に埋れてゐるやうな村だつた。半ば漁村、半ば農村と言つた風で、路が崖に從つて折れ曲つてついてゐた。汽船の艀のつくところは、石廊岬の裏を奥深く入つて來たやうなところで、そこには旗が立つてゐたり、砂濱の日あたりに坐つて漁夫が網のつくろひをしてゐたりしてゐた。船なども澤山置いてあるのを見た。

それをずつと行つて、たしか石の井戸のあるところから、石廊の方へ入つて行く路はわかれて行つてゐたと覺えてゐる。そこは暫しの間、かなりに急な勾配で、草路で、それが盡きると、松の林になつてゐたと覺えてゐる。そしてその松の林の中の路は十二三町續いた。そして始めて美しい西海岸の海の瀲灩として日に光りかゞやくのを見た。

石廊の燈臺のあるところは、最早そこから遠くはなかつた。

十四

伊豆相模にはこれほど溫泉があるのに、駿河から遠江、三河、尾張、美濃にかけて、溫泉の分布は極めて稀であつた。駿河の藤枝の近所に志太といふ湯があるけれども、これはわかし湯で、さう大してすぐれた溫泉といふことは出來なかつた。

この間には、見るところが非常に多かつた。三保、久能などには是非とも一日二日を費さなければならないところであつた。濱名の湖畔にも捨て難い海と山との眺めがあつた。渥美半島、知多半島、あの二つの半島の中に一つでも好いから溫泉があつたならと何遍思つたか知れなかつた。

蒲郡あたりにも、非常に溫泉が欲しいと思つた。

濃尾平野に溫泉のないといふこともさびしかつた。從つて名古屋の人達は、溫泉と言へば、き

まつて湯の山へと出かけて行く。藝者などが遠出をするといへば、きまつてそこである。それは他でもなかつた。伊勢の四日市から軌道で入つて行く菰野の溫泉であつた。

これはかなりに昔からきこえてゐる湯であつた。文人の筆に成つた紀行文もかなりにある。湯の多い關東東北の地方から見れば、このくらゐの溫泉は、さう大してすぐれたものとは言ふことは出來なかつたけれども、それでも、かうして軌道まで出來て、益々繁華になつて行くことを考へると、いかにあたりに珍重されてゐるかといふことが知れた。

その溫泉は鈴鹿山脈を背後に、伊勢灣を前にしたやうな位置にあるので、眺望はかなりに好く、その浴舍の二階から、知多の西浦を一目に見ることが出來た。

それにしても思ひ出さるゝのは、知多半島の河和から山越しに、源義朝の遺址のある野間へと行つた時のことであつた。そこから見た眺めはいかにもひろびろとしてゐた。

私は一緒に旅行してゐる男の兒に言つた。

『そら、向うに大きな山が見えるだらう。白く、雪が積つて?』

『あゝ』

『あれが伊吹山だよ』

『近江の?』

男の兒はじつと見入つた。その前には西浦の海が蒼くひろくひろがつて一目に見えてゐた。

『此方の山は?』

ずつと長く、障壁のやうに連つてゐる山脈を男の兒は指した。その山脈にも、奥の山々に白く雪が見えた。

『あれは鈴鹿山脈だ……。そら、その下に白い壁などがごたごたと固つて見えてゐるだらう?あれが四日市の港だ……』

『奥の高い山は?』

『さア、御在所ヶ岳かな……。さうだ、丁度湯の山の溫泉があの下のところあたりになつてゐるから?』

『溫泉があるの？』
男の兒はめづらしさうに叫んだ。
『あそこに溫泉がある。あの白い雪の山の下のところに？』
『行かうか？』
『だつて大變だ。ぐるりと海を廻つて行かなければならないからね？』
『この近所には、溫泉はないの？』
『ないね』
『何うしてないの？』
『何うしてつていふこともないよ。分布がないんだよ。』
『行きたいな』
男の兒でなくても、自分でも、そこらに溫泉でもあつて、ゆつくり一夜泊つて行くことが出來たなら、それこそ何んなに好いだらうと思つた。しかし、この地方では、さうしたことは容易に

望まれなかつた。何處に行つても溫泉はなかつた。
『その溫泉は山の中？』
また男の兒は訊いた。
『軌道があるから、この海を廻つて、名古屋に出さへすれば、ぢき行けるには行けるけどもね…』
かう言つて私もじつとその海を越した山脈の白い頂を眺めた。それは寒い寒い日であつた。いかにも溫泉などの思ひ出さるゝ日であつた。私は曾て二十年前に、その山腹の溫泉の旅舍の二階から、海を越してこの今通つてゐる知多半島を望んだことを思ひながら、その山を越して行つた。
山の雪はキラキラと美しく日に光つた。

十五

岐阜附近にも溫泉はなかつた。養老の山の中にもなかつた。關ヶ原あたりにでもあつたなら、何んなにあそこいらが色彩を添へて來るだらうと思つて見たところで爲方がなかつた。

從つて、この地方の人達でも、溫泉と言へば、屹度菰野（湯の山）に行く。そしてそこで滿足の出來ない人達は、上方の人達と同じやうに、裏日本の溫泉地方へと出かけて行く。

琵琶湖の沿岸などは、ことに溫泉の思ひ出されるところだつた。安土あたり、八幡あたり、でなければもつと東の山の奥でも好い。永源寺あたりでも好い。あそこいらに、ちよつとした溫泉でもあれば、それこそ何んなにあそこいらが活氣を帶びて來るか知れないのであつた。まして西岸地方——今津あたり、饗庭野あたり、もつと奥の鹽津あたり、あそこいらに溫泉があつたなら、あのさびしい琵琶湖の西岸も、それこそ賑かになつたであらう。交通の便ももつと盛になり、あ

の太湖會社の汽船も、もつと利益が多く得られるやうになるでせう。竹生島に詣づる人達なども、非常に多くなつて行くであらう。長濱あたり、賤ヶ岳あたり、余吾湖あたりにも溫泉が欲しかつた。

溫泉がないけれども、琵琶湖のことを少し書いて見やう。つまり裏日本の溫泉地方に赴く上方の人達が、ちよつと低徊して、琵琶湖を渡つて、あちこちと見物して行くといふことも、滿更ないことでもないと思ふからである。

琵琶湖は何と言つても、奥深く入つて行かなければ駄目であつた。三井寺、石山寺、唐崎の松、阪本——あそこいらだけでは決して琵琶湖を本當に見たとは言へなかつた。何うしたつて、堅田あたり、雄松崎あたり、それからもつと先まで入つて見なければ十分とは言へなかつた。しかし幸ひに太湖汽船會社の汽船があつた。その汽船はいつでも樂に旅客を其方へと伴つて行つて呉れた。

唯、殘念なのは、その汽船の速力の遲いことであつた。大津から竹生島あたりまで尠くとも六

七時間はかゝつた。從つて、場合に由つては、汽船の中で一夜寢て行く方が便利なくらゐであつた。夜の八時に大津を出帆した汽船は、翌日の夜明でなければ長濱に着くことは出來なかつた。

堅田、雄松崎、すべて好かつた。中でも雄松崎の白砂青松と、比良山の翠微とは、私の心を惹いた。遊覽の人達も石山三井あたりで引返さずに、是非とも此處等あたりまで入つて來て貰ひたいと思つた。饗庭野から今津にかけても、いかにも靜かな世離れた氣分があつた。

で、汽船の中で一夜泊る。そしてあくる朝、竹生島に參詣する。朝の竹生島は、何とも言はれない印象を旅客に與へるに相違なかつた。そこは月の夜も好かつた。雪も好かつた。中でも春の暖かな靜かな菜の花の咲く時分が好かつた。

此處等あたりで見ると、琵琶湖は湖水と思はれないくらゐひろびろとしてゐた。それに、北の一帶の山巒が高いので、大津あたりに比べて嵐氣が饒く、雲のたゞずまひも凡でなかつた。

汽船が長濱に着かうとする頃には、殊にその山巒の起伏がはつきりと手に取るやうに見えた。そこから見た伊吹山の雄大なのは言はすもがな、右は鈴鹿山脈の靈仙寺山からかけて、左は越前

美濃境の深い深い山巒まで、唯一列に連りわたつて見えた。そして仔細に見れば、その中に淺井長政の小谷山もあれば、秀吉の旗差物を立てた虎御前山もあるのであつた。

ある年、私は北陸の雪の溫泉に出かけたことがあつた。私は東から來て米原で汽車を乘換へるために二時間以上待つた。そこはかなりに寒いところであつた。湖上の風が冷めたく頰を吹いた。それでも地上にはまだ雪がなかつた。

ところが、そこを出て長濱を過ぎ、木の本を過ぎ、次第に越前境の山の中に入つて行つて、余吾の湖の小さく山巒の間に埋められたやうになつてゐるのを見るあたりから、雪は一刻毎に深くなつて、柳瀨あたりに行くと、最早全く雪の山國となつて了つた。

十六

私達は敦賀に來て下りた。

此處に來ると、全く感じが違つて來てゐるのを私達は發見した。それは地上にはまだ雪はなかつたけれど――峠を越して來る間に見たやうな深雪は、何處かに消えて行つて了つたけれども、それでも山の雪はキラキラとして、そこから下して來る風は、耳も手も切らるゝばかりに冷たく、踏む土は固く凍つて、駒下駄の音が、歩くにつれてカラコロとあたりに響いた。

あの停車場前のひろびろとしたところを町まで入る寒さ、寒さ、寒さ――すぐ前に聳えた山巒も全く雪に埋れて、碧い空をそのまゝ劃つたやうにくつきりと寒さうに立つてゐるのを私達は見た。

『あ、それが蠑螺ヶ岳だね？　さう言へばそつくり蠑螺だ……』

私はかう思はず言つた。

夏はそれと思へなかつた山が、冬來て見て、始めてその形をそれと發見したのは、面白いと私は思つた。私はじつとその螺螺の形をした山に見入つた。

私はそこに碧い海を想像した。松原の長くつゞいた公園を想像した。關東地方に生れて、曾てはあの筑波山に義旗をひるがへして、そして此處に來て切腹したアイデアリストの末路を想像した。また、京都から琵琶湖の西岸をこの猫の額のやうなところへと入つて來て、雪に埋められて、遂にあの悲劇を構成した南朝の將軍ことを想像した。

しかし、今の敦賀は、さうした歴史を思はせるのには、あまりに相應はしくなくなりすぎてゐた。今の敦賀は全く裏日本の港門になりすぎてゐた。ロシア語で書いた理髪店の看板などが著しく目につくやうな町になつてゐるのを私達は發見した。

唯、北海の町としての著しい氣分を感じさせたのは、その町の到る處に、小さな鰈が糸につるされて薄い冬の日に干されてあるのと、肴屋の店に大きな蟹と赤い小鯛との際立つて見えてゐ

るのとであつた。何となしに、私は海を思つた。寒い寒い海を思つた。

金崎の宮は停車場から少くとも十五六町はあつた。その途中に、此地方第一の古社で、神功皇后時代からあると言はれてゐる氣比神宮があるから、そこにお詣りして、それから町を眞直に向うに抜けると、堀割に橋がかゝつてゐて、それをわたると、その入口までもういくらもなかつた。實際、猫の額のやうなところであつた。こんなところに押詰められては、いかに義貞でも何うすることも出來ないであらうと點頭かれた。

しかし、春は美しいであらう。その境内の櫻でも咲いたら、何んなものでもその歴史の悲劇を思はずにはゐられなくなるであらう。だいたいけない親王の前に、自殺の刄をさし出した武將――それだけ考へただけでも、胸がさけるやうな思ひがせずにはゐられなくなるであらう。ましてそこから見た海の美しさは？　海の色の碧さは？　汽船の碇泊してゐるさまは？　私は過き去つた時代と今の時代との一緒になつてその前にあらはれて來るのを思はずにはゐられなかつた。

私達は宮にお詣して、それから裏の方へとぐるりと廻つた。そこからは、敦賀の港が一目に見

わたされた。美しく唯、一目に――。

細かな波、碧い海、白い帆、港に近く　外國の汽船が二隻も三隻も碇泊して、その烟突から黄い灰色の烟の靜かに颺つてゐるのを私は目にした。

その時、一緒に行つた男の兒は言つた。

『父さん？　あれ、何だらう？　火事ぢやないかね？』

『さア――』

成ほど見ると、町の半ほどの、海岸に近い人家の簇つてゐる中から、黄い、灰色の、時には薄い紫の烟が太い輪のやうに長く斜に靡きわたつてゐるのが見えた。しかし、何うも火事とは思はれなかつた。

『工場の烟か何かだらう？』

『さうかしら？』

『でも、誰も騒いてゐるやうな樣子がないぢやないか？』

『さうね――』

で、暫く私達はそこに立つてゐた。烟は依然として大きく斜に町の上に靡きわたつて見られた。

私達は此方に戻つて來た。と、それと反對に、宮の方から、町の方から、ぞろぞろ人の此方にやつて來るのに逢つた。

『父さん、火事だよ、さつきのは？』

『さうかな……』

『だつて、この人達、皆なあそこに見に行くんぢやない？』

注意して見ると、成ほどさうであつた。あとからあとへと人達はやつて來た。『見えますか？火事が見えますか？』などと言つて私達に訊いた。

宮から町の通に出やうとする時、私達は初めて半鐘の凄しく鳴りわたつてゐるのを耳にした。風が強いのと、火の手がひろくひろがつたのとで、町では相應に驚かされてゐるらしく、何處の家からも人々が皆な店頭や戸外に出てゐた。奥にゐる娘達までも外へ出て來てゐるのを私達は見

た。橋をわたつて、町の中央部に來ると、消防組がホンブを引出して、急いで出かけるところであつた。

あとで私はその話をして、『旅で火事を見るのは、不思議な氣がするね……。人が大さわぎをしてゐるのに、此方はのんきに、繪葉書を買つたり、晝飯を食はせて呉れる家がないかときいて歩いたりしてゐるんだからね——。お蔭で、僕は敦賀の町の娘といふ娘を皆な見ることが出來たよ』

こんなことを言つて私は笑つた。

十七

その時分、北國を旅すると、雪の深く積つたところがあるかと思ふと、また全く地上に雪のないところがあつたりして、變な氣がした。今庄あたりはかなりに雪が深く、物賣の桐油の上にチラチラ白いのが落ちてゐたのに、少し此方に來て、福井近くなると、全く晴天で、雪は唯屋根の上に殘つてゐるばかりであつた。これを見ても、汽車は一日の中に、いろいろなところを通つて行くのがわかつた。

杉津の冬の海は相變らず美しかつた。

『こゝと親不知とは、裏日本の二つの奇勝だね？』

『さうだね』

『何方が好いね』

『僕はこつちの方がぐつと好いと思ふね』

二人づれの學生らしい男は、こんな話をしてゐた。成ほどさうだと思つた。それは歩いて見ては、無論親不知の方がすぐれてゐるには相違なかつたけれども――或はこの二つを比較するのが初めから間違つてゐるくらゐであるかも知れなかつたけれど、しかし、汽車では、汽車だけで見ては、この杉津の洞の方がぐつとすぐれてゐるに相違なかつた。トンネルを一つ。また一つ。更にまた一つ。さういふ風に、出て行くたびに、その海が段々遠く、パノラミックになつて行くさまは、何とも言はれなかつた。その積雪の中に思ひ切つて碧く海の見えてゐたのも私には忘れかねた。

この他私は朝倉義景の古城址のある一乘ヶ谷と、爪生保の柚山城址とを子供達に指し示したことを思ひ起した。

で、日の暮れる頃に、福井の先きの金津で下車した。私は蘆原温泉に行かうとしたのであつた。その金津で下りる少し前に、汽車は轟々として九頭龍川の鐵橋をわたつた。私は地圖を檢して

子供達に言つた。

『新田義貞の戰死したところは、そのすぐ向うだよ』

『藤島？』

『いや、燈明寺畷――』

かう私は言つた。薄暮の空氣は既にあたりを深く包み始めてゐた。汽車の轟々として音を立てゐる間、私は大きな川の白く流れてゐるのを目にした。

金津を下りた時には、何となくさびしかつた。また、寒かつた。金津までしか、切符が買つてないので、一度出て、そしてまた切符を買ひ直して乘らなければならなかつた。三國の方へと行く汽車はもう出かゝつてゐた。烟突からは煤烟が湧き上つてゐた。

幸ひに間に合つた。私達が乘るとすぐ發車した。

スチイムの入つてゐる暖かい幹線の汽車から、この暗い火の氣のない田舍の軌道車に入つて來た時は、私達は急に北國の寒さの身に染みわたつて來るのを覺えた。幸ひに、隣に坐を占めてゐ

た紳士が親切で、いろいろとその土地の話をして呉れたので、お陰で、その寒さをもいくらかまぎれることが出來たやうな氣がした。

その紳士はいろいろないとを話した。蘆原の溫泉のことも話せば、三國のことも話した。また罐詰の出來るやうになつてから、蟹の高くなつたことも話した。『なアに、元は安かつたもんですがな……唯のやうなもんでしたがな……。高くなりましたよ』などと言つた。

蘆原の溫泉については、『さア、好くなるにはなりました。福井が近いので繁昌しますけども、何しろ、また年代か經つてゐませんからな。たしか明治の十五年か十六年かに始めて開けたんですからな』

『そんなに新らしい溫泉ですか？』

『え……。もとは沼でしたな。私なんかでも覺えてゐますよ。勿論、その時分かい、あそこからは湯が出る、湯が出るツて言つてゐたにはゐたんですけども、何しろ、設備が大變ですからな……。あれでも、あれまでにするには、いろんなことがあつたんですよ』

『しかし、今では立派な溫泉場になつてはゐるんでせう？』

『それはなつてゐまさ……。旅舍だつて、隨分多くなりました。お出になりや、おわかりになるが、今では立派とは行かなくつても、兎に角湯の町らしくなつてゐますからな』

紳士は三國港の話をしたり、その港の衰へて了つた原因を話したりしたが、私達が明日東尋坊に行く話をすると、『あ、あそこに行きますか。なアに、わけはありやしません。何でも遊覽船も出る筈ですけども、歩いていらつしやる方が便利です。さうですな、一里位しかありやしません』などと話した。

お蔭で、寒いのもさう寒く感ずるひまもなしに、やがてその次の停車場に着いた。そこは蘆原であつた。

私は一種なつかしい氣分を感じた。それは丁度薄月のある夜で、地上にはまた雪はなく、寒いには寒いにしても、何處か春めいた感じがあたりに漲つてゐた。停車場から突當つた細い通には、溫泉場らしい軒燈が庇を並べてついてゐて、ある家からは、低い三味線の音が靜かにきこえてゐ

たりした。

私達は紳士に聞いた旅舍の名を一軒一軒覗いて行つた。

しかし、それは容易にやつて來なかつた。いくらか不安になつて、向うからやつて來た人に訊くと、『K樓ですか……。それなら、まだずつと先きです。これを行つて、右に曲つて、一番外れの右側の家です……』と言つて、わざわざもどつて指して敎へて呉れた。

『大變遠いんだな！』こんなことを獨語のやうに言ひながら、私達は猶ほ一軒一軒覗くやうにして行つた。家屋は次第に疎になつて行つた。灯も盡きて、あとには二つ三つ闇にそれと見えてゐるばかりになつた。

遂にK樓の名をそこに見出した。

それは紳士の言つた通り、果して靜かな好い旅舍であつた。頰の紅い女中は、赤く起きた火を澤山十納に入れて持つて來てすぐ火燵をして呉れた。私達は浴衣を着て急いで湯に行つた。

いかにも新しい湯といふ感じがすると同時に、私は越後の村上の先きにある瀬波の溫泉を思ひ

出した。それも矢張二十年ほど前に初めて噴出したものであつたが、いかにもその湯の新しい感じが似てゐた。古い、年代を經た湯は――たとへば道後とか有馬とか、北陸で言へば山中とかいふ湯は、何處か肌のさはり加減が柔かではあるが陰氣でいやにべたべたするやうな氣がするのに引かへて、新しい湯は、荒くはあるけれども、何處かさばさばと心持よく爽かなところがあつた。この湯などもたしかにその一つであつた。それに、その旅舍の設備も非常によく整つてゐたし、浴槽なども箱根に匹敵するに足りるほど綺麗であつた。

私はこのあたりが沼であつた時のことを想像した。この北陸の海岸は、東尋坊あたりから能登の敷波あたりまで、平滑な砂濱になつてゐるが、そのところどころに潟湖が出來てゐて、このすぐ上の大きな潟、更に進んで柴山、今江、木場の三潟、更に北に河北潟などといふ大きな潟湖があるが、こゝもそのためしに洩れない小さな潟湖であつたに相違なかつた。つまり、あの伯耆の東郷湖の中の東郷溫泉や柴山潟の中の片山津溫泉などと同じく日本にめづらしい湖の溫泉の一つであるに相違なかつた。『へえ、今でも、また沼のあとはいくらがあります……。大抵は埋立てゝ了ひ

ましたけれども……』こんなことをその旅舎の主人は言つた。

十八

衰へ果てた三國の港から、九頭龍川の河口近く、ぐるりと海岸を向うに廻ると、ひろびろとした日本海は一目にひらけて、寒い、寒い風がまともに顔に吹きつけて來た。しかし、私達の目ざして來た東尋坊は最早そこから遠くはなかつた。一ちやうば砂濱を越すと、疎らな松林があつて、そこから、雄島に行く道と東尋坊に行く道とが左右にわかれてゐた。私達は右の細い道を取つて、松林の中へと入つて行つた。

三四町行くと、その松林は盡きて、あとは萱だのの生えてゐる草原になつた。路はうねうねと蛇ののたくつたやうに折れ曲つてゐる。向うに小高いところが見える。中途で路が見えなくなつてゐるので、何うなつてゐるのかわからないが、多分その小高いところへのぼつて行つてゐるのであらうと思はれる。路は一度上つてそして一度下りた。小松がそこ〻に生えてゐる。

下は碧い碧い海だ。

向うから漁師風の男がやつて來たので訊いて見た。

『東尋坊は此方へ行つて好いんでせうか？』

默つて後を指したまゝ、摩れ違つて行かうとした。

『また、仲々ありますか？』

『いや、もうすぐ……』かう言つて、スタスタ向うに行つて了つた。

果してその通りであつた。その小高いところへと路をついてゐて、その傍のところをぐるりと廻ると、そこに、下に、無數の大きい小さい黑い灰色した岩があらはれ出した。『あ、此處だ！此處だ！』私は思はず聲を立てた。

始めはそれほど驚きもしなかつたが、進むにつれて、次第に嘆賞の聲が口から出るやうになつた。『はゝゝ』と私は言つた『ちよつと面白いな……かういふ風に一かたまりに固つてゐる形が面白いな……。たしかに特色がある！』

かう言つたが、先の方に出て行かうとする男の兒に向つて、『おい、おい……あんまり先に出てはいかんよ。岩が崩れ易いから、餘り端に乘つたり何かすると、壞れるからな』

『大丈夫だ……』

『大丈夫ぢやないよ。注意しなけりやいけないよ』

私達はそれからそれへと歩き廻つた。次第に岩石は大きくめづらしくなつて行つた。中には筍のやうなものもあれば、傘を開いたやうなものもあつた。ある絶壁には、波濤が凄しく押し寄せて、碎けて、そして雪か花のやうに散り亂れた。

成ほどこれは陸上から見るよりは、舟を艤して、下から仰くやうにして見る方が一層すぐれた感じを人に與へるかも知れない私は思つた。私の頭には、今までに見たこれに似た感じのする海と岩とが頻りに思ひ浮された。若狹の大門小門、筑前の芥屋の大門、出雲の日の御岬の岩窟などが——。

『しかし矢張、此處には此處の特色があるな……』暫くあたりを眺めてから、私はこんなこと

を言つた。

私達は岩から岩へと渡つた。次第に大膽になつて、後には足元を注意しつゝ、あんなところと思はれるところまで行つた。奇岩の盡きたところからは、雄島の姿がはつきりと手に取るやうに見えた。

私達は一時間ほどそこにゐて、そして引返した。日影は麗かに照つてゐたけれども、海から來る風はいかにも寒く、とても長くそこに佇立してゐることは出來なかつた。

私は若狹の大門小門、それから敦賀の常宮附近、杉津の海岸、能登の海岸、親不知、越後の鯨波、海府浦、それから男鹿半島、大戸瀨、龍飛岬と、かう長くつゞいてゐる裏日本の海岸線上にある岩石と徒崖とが、波濤と相爭つてゐるさまをはつきりと眼の前に浮べずにはゐられなかつた。否、そればかりではなかつた、若狹から下つては天橋立、久美濱、伯耆因幡の海岸、出雲に行つては、例の加賀のくけ戸などの奇勝をつくつて長く長くつゞいてゐた。

この中では、窟としては男鹿半島の蒿雀窟、越後の親不知、岩石としては陸奥の大戸瀨、それ

に次いで若狹の大門小門、つゞいてはこの東尊坊であることを私は思つた。私は若狹の大門小門に行つた時のことを思ひ出した。小さな舟に乘つて大洋に出て行く危險を犯さなければその奇勝を見ることが出來なかつたことを思ひ出した。またその岩石が大小の門をなして、その中に小さくはあるが瀑の落ちてゐるさまが何とも言はれず見事であつたことを思ひ出した。またその門の中に舟を繫して、ビールを飲み、小鯛の押鮨を食つた時の樂しかつたことを思ひ出した。しかし、一番規模の雄大なのは、矢張越後の親不知ではないか。日本アルプスの末梢だけに、岩石も怒濤も、またあたりのさまも、他とは比較にならないほど大きな感じを持つてゐた。

私達は來た時とは違つて、お宮の中を通つて、近路をして、そして再び三國町の方へと出て來たことを思ひ起した。そこはいかにも港らしかつた。昔榮えて今衰へた和船の港らしかつた。河口の岸に大きな倉庫が密しく並んでゐるのも何となくさびしかつた。町の通には、髮をぶるぶる卷にして、脚絆草鞋をつけて、『蟹！　蟹！　精子蟹いらんかな！』かう言つてぼてをかついで闊れて歩いてゐる漁師の嗚達があつた。

さう言へば、その蟹の旨さを私は忘るゝことが出來なかつた。『冬だつたら、三國に行つて蟹を食ひ給へ。ことに、普通の、東京にもあるあの足の長い大きな蟹でなしに、甲をほかりとはがして食ふ精子蟹を食ひたまへ。あの味は何とも言はれない！』かう歸つてから後も、私は多くの人々に話した。

十九

再び金津にもどる。こゝから溫泉軌道のわかれる驛までは、冬は何とも言はれないほど美しい白山連峰を望むのに好いところであつた。

汽車の通るところは、越前平野で、地上にはまだ雪がなく、あたりは灰色また鼠色で一面に塗られてゐるのに拘らず、丘陵から山巒へと入つて行くのにつれて、次第に白く、斑らな雪から、濃い雪になり、更に奥深く白壁でも塗つてゐるやうになつてゐるのを旅客は見るであらう。否、更に、その連つた山巒の上に、素晴しく高く白く美しく聳えてゐる白山の姿を發見するであらう。

むら山の
しけきか上に
あらはれて

ましろなりけり
越の白嶺は

私の胸にはひとり手にさうした歌がのぼつて來た。私はポッケットの中から手帳を出してその歌をかきつけた。そしてその次手にその山の姿をスケッチした。

しかし、これは冬だけであつた。冬もまだ雪の來ない中の冬だけであつた。雪が來ては、もう駄目である。思ふに、秋の晴れた日などには——野の收獲をする頃には、連日その白山の姿を見ることが出來るであらうが、あとは春も曇り勝で見えず、夏も雲が多くて見えず、度々この線を汽車で行つても、容易に白山の姿を望むことは出來ないのであつた。

溫泉軌道が出來ない中は、何うしても一番先に大聖寺から馬車鐵道で山中溫泉に行き、それから山代溫泉に行き、片山津に行き、粟津に行くといふやうになつてゐたが、今では何處へでも勝手に好きなところに一番先きに目蒐けて行けるやうになつた。曙から粟津へ行くのなどは特に便利だ。先づ粟津へ行き、次に片山津に行き、それから山代、山中といふ風に出て行くのも面白か

つた。

溫泉のこともあるが、それよりも私はもう少しこの附近のことを書いて見たい。此處等はそれからそれへと遊んで見ても興味の多いところであつた。柴山、今江、木場の三つの潟の連珠のやうに連つてゐるのも面白ければ、三湖台から、この三つの潟湖を望んで見るのも愉快であつた。それに、その北に連つてゐる日本海に面した松林——この松林の中を往昔の北國街道が通つてゐて、そこに例の齋藤實盛の戦死した古墳が殘つてゐるのなども、旅客に取つて忘れられないものの一つであらうと思はれた。

その松原の中を私は半日以上歩いた。あの凄しい怒濤——地を撼して來る怒濤、成るほどこれでは年々土地が侵蝕されずには置くまいと思はれるやうな怒濤、それがいかにも耳にひゞくやうにきこえて、そしてその中に時を刻んだ松風の音が靜かに靜かに琴でも奏づるやうに響いた。いかにもなつかしかつた。またいかにも世離れてゐた。

この松原の中には、漁村が處々に散點してゐて、中には鹽などを燒いてゐるところもあつたや

うに記臆してゐるが、實盛の墳のあるところは、往昔の北國街道からちよつと左に外れたところで、たしか五輪の塔が依然としてそのまゝに殘つてゐたと思つてゐる。そこに行くと、平家の軍勢の追ひ立てられて敗北して行くさまが、古い繪でも見るやうにはつきりと眼の前に浮んで來た。

この松原の中には、ところどころ西瓜の出來るところがあつて、それを擔いで市場に持ち出して行く女達の三々伍々群を成してやつて來るのに逢つた。

柴山潟は丁度この松林の内部になるやうなところに位置してゐて、その緣を路がうねうねとめぐつてついてゐた。沼には蘆や眞菰が一面に生えて、小さな舟が一隻二隻その中に漂つてゐた。漁師が鰻をとるために、その小舟を巧にあやつつて、置針をそこから此處へと置いて行つたりしてゐるのをも見かけた。河骨の花や、水あほひや、その上を飛んでゐる蜻蜓や、ひよつくり首を出しさまたひよつくり沈んで了ふむぐりや、紅く白く咲いて蓮の花や、そのシインは、いかにもラツチツクな夏の濃い色彩に塗られてゐるのを私は思ひ出した。

私は惜しいことには、片山津には一夜も泊らなかつた。湖に臨んだ旅舍で、晝飯の出來る間に、

ちよつと湯に入つて、上つて來てから、ビールを飲んで、飯を食つてそしてそこを立つて來て了つた。從つて詳しいことは知らないけれども、水に近いだけそれだけ靜かな溫泉であつたやうな氣がした。日本海の波の音が前に言つたそのひろい松原を隔てゝ、さながら地を撼かすやうにきこえて來た。

粟津は小ぢんまりしてゐる。片山津が湖の溫泉であり、山中が山の溫泉であり、山代が平野の溫泉であるなれば、こゝは丘の溫泉であると言ひたい。そこに全くかけ離れてゐる。靜かに落附いてゐられるやうな氣のするところである。それに、この近くに、例の北陸の名勝那谷寺がある。例の觀音が祀つてある。

こゝは那智山の那の字と美濃の谷汲寺の谷といふ字を取つてつけたといふだけあつて、流行佛としてもかなり世に名高くきこえてゐる。香烟も從つて盛である。それに、堂とあたりの山々の具合がよく小ぢんまりと整つてゐて、感じがわるくない。紅葉の時などには、人はわざわざそのために出かけて行くくらゐであつた。

『さうですな、粟津が矢張一番落附きますかな』

かうした言葉を私は少くとも三四人の人々から聞いた。またある人は言つた。『さうですな、山中も好いには好い。いかにも古風で好い。芭蕉の句に何とか言ふのがありましたな。菊時分でも菊もかゝさないで湯に入るッて言つたやうな句がありましたな……。さうさう『山中や菊も手折ぬ湯の匂ひ』でしたな……。さういふ風な古風な、田舎は田舎のまゝで固まつて、そのまゝ何百年を經たといふやうな古い氣分がありますよ。あれか山中では忘れられない氣分ですな……。あの町の通りが狹く、古い旅舍が立並んでゐる具合なども、陰氣には陰氣だが、何處が古い匂ひがしますな……。それから比べると、山代は極く新しく開けたといふやうな氣がして、町にしても浴槽にしても、すべて俗で、雅でない……。あれはまア酒でも飲んで、女でもつれて行つて、おもしろ可笑しく遊ぶところでせうな。粟津ですか？　あそこも好い……。秋なんか殊に好い。しかし、夏はあまり涼しいところではありませんよ。矢張、あそこも紅葉時分でせうな』

『山中にも内湯ッていふものがないやうですが、あつても形式だけのやうですが、矢張、湯が少

いんでせうか？』

『湯も關東の湯のやうに、ありあまるほどあるといふのは少いでせうな。それは何うしても湯の多いのは、北陸では、和倉でせうな……。しかし、あの總湯式の設備は、皆な道後、有馬あたりから來てゐるのでせう。上方の感化でせう。形から言へば古風なんでせう。溫泉も昔は、通りかゝりの人でも入つて行かれるやうに、道の眞中にあゝした大きな總湯をつくつたのが始めでせうからな』

『それはさうでせうな……』

『何しろ、上方の感化は大したものですよ……』かうその人はつゞけて話した。『あの湯女などでも、皆な上方式でせう。つまり上方風の田舍化でせう。だから同じ上方式でも、何處かに土臭いところがある。それに料理だッて、取扱方だッて、皆な上方ですよ』

『盛んなものですな、上方の感化力といふものは？』

『何しろ、金澤の狹斜街がさう、新潟がさうですからな。皆な和船の交通が持つて行つたんで

せうが、大したものですよ。裏日本には、關東の影響にいふものは殆どないと言つて好いですからな……。もつと大きく言へば、鶴岡だッて、酒田だッて、もつと先きの秋田だッて、弘前だッて、皆なさうですよ。關東なんか、それを思ふと、その感化力は微々たるもんですな……、下國なんて言はれるのも無理はありませんな』

かういふ風に抽象的に見るのは好いかわるいかわからないけれども、兎に角、さういふ處のあるのも事實だッた。山中にさうした古風な匂ひがあるといふことは、好い觀察の一つと言つて差支なかつた。實際山中は陰氣だけども、何處か旅客を落附かせる、また樂しませるところがあつた。たとへて言つて見れば、老舗と言つたやうな氣分である。

山中には普通大聖寺の停車場で下りて、そこから軌道で行くのか普通たが、今は溫泉軌道が出來て、粟津からでも、片山津からでも何方からでも行けるやうになつてゐた。山中にある山中漆器は、山代の九谷陶器の陶器と倶に湯歸りの好土產とすることが出來た。

この溫泉軌道を利用して遊びに行つて見るところは、この他に三湖臺、安宅關の址などがあつ

た。後者は日本海に瀕した土地が年々いくらかづゝ陷落するため、今は全く海の中になつて了つて、そのあとも何もなくなつて了つたけれども、その安宅といふ町も海岸の小さな町として殘つてゐるばかりで何も面白いといふこともないけれども、それでもそこに行つて昔のことを思つて見るのも興味がないではなかつた。三湖臺にも、ひまがあつたなら、出かけて行つて、そのさびた湖の姿に『詩』を思つて見るのもわるくはなかつた。

山中にある蟋蟀橋の持つた溪流は、溪流としてはさう大して立派なものではなかつた。いかにしても規模が小さかつた。變化に富んでゐなかつた。しがし溪流の美に乏しいこゝらあたりでは、これでも珍重すべきものであるかも知れなかつた。橋のほとりには、休茶屋などがあつて、夏は涼しいところであつた。鮎なども獲れた。

この他には、手取川の大きな谷、小松町にある齋藤實盛の遺物を藏した神社、それから美川の小舞子など、皆な行つて見ても好いところであつた。小舞子には、夏だけ汽車が臨時停車場を設けた。

二十

津幡を出た時は、もはや薄暮だッた。從つて河北潟の水光もその髣髴を輝したばかりで、やがてあたりは暗く、暗くなつて行つた。山も、野も、松原も、村も、丘も、何も見えなかつた。唯、汽車だけがゴトンゴトンと音して進んだ。

津幡から七尾まで、この間にはかなりにいろいろなものかあるのであつた。敷浪附近のあのインプレッショニストの描いた繪のやうな松原もあれは、上杉謙信の古戰場である寶達山附近のシインもあるのであつた。例の邑智潟の溶々とした湖水、古い一宮神社のある海濱、すべて旅客の思ひを惹かないものはないのであつた。私は前に一度來たことがあるので——來て見て知つてゐるので、さうした光景や物象のすべて一抹に夜の色に包まれて了つてゐるのを遺憾にした。畫ならば、何んなに色彩か鮮かであらうのに——。かう思ひながら、私は何遍となく窓から戸外を覗

くやうにして見た。

夜は暗かつた。唯、星がキラキラと光るばかりだつた。

しかし、この通つてゐる間が松原であるといふ感じ、その松原の中のところどころに小さな停車場があるといふ感じ、その小さな停車場にぽつつり一つ灯がついてゐて、汽車がとまると、二三人の客がさびしさうに降りたり乘つたりして行くといふ感じ、それは私に何とも言はれない『詩』と情緒とを感じさせるに十分であつた。私はじつと腰を落附けていろいろな空想に耽つた。

かうした停車場にさびしさうに下りて行く人達は、その近くに同じくさびしい灯の少い町を發見するであらう。そしてそこに小さなさびしい旅舍を發見するであらう。さびしく一夜をそこに過すであらう。でなければ——旅客でなしに、その近くの人達であるならば、馴れた路を樂しい心で歸つて行くだらう。松林の微かに鳴る聲を耳にしては、ひとり手に歌でも唄ひたくなるだらう。そして遙かに自分の妻や子の待つてゐる灯を望んで幸福な思ひに滿されるだらう——突然、私は耳を欹てた。

『さうですか、四十年ぶりで、國に歸つて來たんですか。それは大變だ』

かう私の傍にゐる男が言つた。その男はさつきから、その向うに腰掛けてゐる五十先の男と頻りに北海道の話をしてゐたのであつた。

『何しろ、いろいろなものが變つゐるのにびつくりするな……この汽車なんかだッてさうだ。昔は此處はよく歩いて津幡へ行つたもんだ……』

『親はまた丈夫でゐるんですか?』

『いや、もう死にましたよ。何うかしてな、母のゐる中に歸つて來てい、來ていと思つてゐたんだけども……それも出來ねえでな』その人の聲は低くかつた。

『四十年ッて、それは大變だ。それぢや、お前さん國を出て行つたのは、十七八の時だつた勘定だね?』

『さうだ……十七だッた』

北海道の話よりもその話の方が面白いといふやうに、聞いてゐた方の男は、膝を乘り出すやう

にして、『ヤ、それはえらいこつちや……。それで、お前さん、北海道にちやんと一軒家を持つてゐるんけえ？』

『家も嗅もあるだよ』

『此方では兄とか弟とかがあとをついてゐるんだな？　それぢや――』

『兄があとを取つてゐたんだが、それも死んで、今ぢや甥ッ子があとをやつてゐるんだ？』

『これから歸るところなんだね？　何處だね？　お前さん――』

『敷浪在だよ』

『ぢや、もう、この次ぎ下りなけりやなんねえんだな』

『さうけえ、それぢや大變だ』かう言つてその男は下りる支度をし出した。

私は不思議な氣がした。到るところにロオマンスがあるやうな氣がした。背の低い皺の寄つた頭髪も半ば白くなつたその男の姿は、いつまでも私の頭に深く印象されて殘つた。

『何うもいろいろ難有う……。車があれば好いがな……』

敷浪驛に來ると、こんなことを言ひながら、大きな包を持つて、そしてその男は下りて行つて了つた。汽車はまたゴトンゴトンと進行し出した。

外には矢張、闇と松林とが長く長くついてゐるらしかつた。

車室の中を私は見廻した。さつきの一事で、私の心は外から内の方へと引寄せられたのであつた。そこにはいろいろな人達がゐた。窓に頭を寄せて眠つてゐるものもあれば、大きな包をかゝえて、キヨトキヨトとあたりを見廻してゐるものもあつた。話はそこでも此處でも始つてゐた。米の話をしてゐるものもあれば、今年の鰊の不漁であつたことを話してゐるものもあつた。若い男と女とは、窓に頭を寄せて何かこそこそ話してゐた。

『ヤツ？』

といふ聲が向うの方でした。皆な吃驚した。皆なの視線は一度に其方に向いた。しかしそれは何でもなかつた。そこに、向うに鬚の深い行者風の男が趺座をかいたまゝ珠數をもんで頻りに行をやつてゐるのであつた。『何んだ！』かう言つて皆なは笑つた。

闇と松原との中を汽車は猶ほ走つた。
窓を透して見ると、外は水らしく、星の映つてゐるのがチラチラと見えた。あたりはひろびろとしてゐた。
『邑智潟の岸を通つてゐるんですか？』かう私は傍にゐる村の青年らしい男に訊いた。
『さうです？』
『ぢや、もう七尾もぢきですな？』
『さうです……』かうその青年は言つたが、『何方へ行らつしやるんです？』
『和倉へ行かうと思ふんですが？』
かう言つたが、ふと思ひついて、『自動車はありませうか？』
『乘合ですね？　さア……。あるにはあるんですがな。何臺もないんですからな……。二臺しかないんですから。餘程早く乘らないと、すぐ滿員になつて了ひますよ』
『そいつは困つたな』

『馬車はありますか？』
『さア、夜は何うですが。晝なら無論あるんですけども……』かう言つたが、その青年は私の方を見て、『だから、爲方がないから、この汽車を下りたら、すぐ飛んで行くんですよ。そしていさなり、自動車のある方などには目を呉れずに、向うの旅舍に行つて、切符を買つちやうんです？さうすれば大丈夫ですよ。二臺は行くですから』
『その旅舍の名は？』
『なアに、すぐ前の宿屋でさ。そこに自動車が出張してゐわけなんですから』
『難有う！』
私はかう呉々も禮を言つた。
實際、七尾ではこの青年の注意に感謝しなければならなかつた。もしその青年が注意して呉れなかつたならば、普通に汽車を下りて、普通に切符をわたして、そして普通にその自動車のあるところへなど行つてゐたならば、私はとてもその二臺しかない自動車などには乘ることが出來ず

に、寒い寒い俥に二時間も戰へるか、でなければ、あたゝかい溫泉宿の一夜の代りに、七尾のわびしい寒い旅舍を我慢しなければならなかつたのであつた。

二十一

和倉の朝は雨だつた。靜かな、冷めたい、あたりが茫と曇つてゐるやうな雨だッた。

私はこれが和倉かと思つた。こんな狹い感じのするところではなかつた筈だ。海がひろく見える筈だ。もつと明るい晴々としたところの筈だ。海にももつと澤山舟があつて、帆などが絶えず見えてゐる筈だ……。昨夜、自動車で別なところへ伴れて來られたやうな氣がした。

しかし次第に和倉だといふことがわかつて來た。この前來た時には、七尾のもう一つ先きの停車場まで行つて、そこから汽船でやつて來たので——夏で明るい晴れやかな海であつたので、それでさう思はれたので、町の通りや、埠頭や、入江や、さういふものにも次第に見覺えがあるやうになつて來た。それにしても、夏と冬とでは、晴れた日と雨の日とでは、かうも感じが違うものかと思はれた。

『丸で別なところかと思つた』

かう番頭に言ふと、

『それは、もう、お話になりませんよ。冬は――。これも、もう少し經ちますと、賑やかになつて來ますけれど……』

番頭は揉手をした。

『春かね？　矢張、一番賑やかなのは――？』

『春も賑かですが、何と言つても、夏場ですな、此處は？　海水浴も出來ますからな……』

『さうだね。夏だね、此處は？　此前に來た時には、こんな暗いさびしいところとは思はなかつた――』

私の眼の前には、明るい碧い海があつた。帆は常に往つたり來たりした。ペンキ塗の汽船も行つたり來たりした。波の上には、游泳の人達が浮んだり沈んだりして、赤い、青い、白い旗がそこ此處に立てられてあつた。ボートも到るところに浮んでゐるのが見えた。

私は硝子戸の傍にある安樂椅子に身を寄せて、じつとそのさびしい冬の海を眺めた。あれが、あの向うに見えてゐるのが、あれが能登島だらうか。その向うにあの海門のやうな小口瀬戸があるのであらうか。そしてこの前に來た時には、そこから宇出津、小木の方へ出て行つたのであらうか。かう思ふと、私は不思議な氣がした。長い年月が曾てはつきりとつかんだ印象をも全く異つたものにして了つたやうな心持がした。

外には靜かに冬の雨が降つてゐた。能登島の山巒には雲がかゝつて、時にはかくれ、また時には現はれたりした。非常にとほいとほいところのやうにも思はれた。海には一帆の影すらもなかつた。

しかも何處かで艶めかしい氣勢はしないでもなかつた。昨夜も、寢てから、下の座敷で三味線の音がして、微かに女の笑ふ聲がしてゐた。今朝はまた今朝で、大きな綺麗な風呂場に入つて行くと、誰もゐはすまいと思つた浴槽の中に、美しい女が白く透き徹るやうな肌と漆のやうな黒い髪とを見せて、向うむきになつてじつと湯の中に浸つてゐた。私も默つて下りて行つて、それと

は違つた方の隅のところに身を沈めた。で、始めは別に口もきかず、互ひに背中合になつてゐたが、やがて女は浴槽から出て、流しで頻りに體を洗ひながら、『此方も矢張お寒う御座いますね？』などと言つて話し出した。二十七八の、美しい、何方から見ても、その道の女としか思はれないやうな女であつた。

段々聞いてゐると、東京言葉なので、

『失禮ですけども、貴方は東京ですか？』

『いゝえ』

女は笑つた。

『でも、言葉が東京のやうですから――』

『さうですか。さう聞えますか？』笑つたまゝ女は頻りに手や足を洗ひ續けた。

暫くしてから、

『さう言へば、東京にゐたことはあります……』

『――でせう？　何うも、さうだと思つた。さうでなくつては、あゝいふ調子は出ませんからね……。それに、東京にもかなり長くお出でしたらう？　一年や二年ではありませんね？』

『よくおわかりになりますね？』女は笑つて、『十年ほどゐましたの？』

『さうでせう。十年ゐれば、まア、東京言葉になつて了ひますからな……。何處にゐらつしやいました？』

『水天宮さまの近所にゐましたの？』

『さうですか……。それぢや東京の眞中だ』よし町の藝者であつたことがすぐわかつた。

暫く沈默したあとで、

『金澤ですか？』

『私？　いゝえ……』

『ぢや、何處から？』

『今ですか？』

かう言つて笑つて、『七尾にゐますの……。生れが此方の方のもんですから、何うしても此方が戀ひしいんですね。三年前に歸つて來ましたの』

『さうですか？　七尾ですか。あそこは好い處ですね？』

『東京なんかよりも、田舍ですから、何うしてものんきですね。東京は面白いには面白いけども、命が縮まるやうな氣がしますもの……』

『何うしてもさうですね』

それからそれへといろいろと話をしたことを私は繰返した。七尾の花柳界の話などをも後には持ち出したことを私はくり返した。その女は今は褄を取つてはゐないかも知れないけれども、自分の名で藝者屋をやつてゐて、抱妓も一人二人はゐらしかつた。旦那と二三日前から湯治に來てゐるらしかつた。

私は深く溫泉氣分に浸つたやうな氣がした。さびしい中に艶めかしい氣分――それが東京の氣分として一番すぐれた情趣であることを思つた。外では雨が瀧縞をなして降つてゐる……。一片

二片雪も交つてゐる……。海は茫として半ば白く半ば灰色にひろく遠くひろげられて見えてゐる……。

私はこの前來た時、七尾から小木の方に行つたことを思ひ出した。汽車から下りると、すぐそこに汽船が出帆するばかりに褐色の烟を颺けてゐるので、晝飯も食はずにすぐ飛乘つた。あの時分はまだ若かつたと私は思つた。旅から旅へと平氣で歩いた。晝飯一度食はずにゐることぐらゐ何とも思つてゐなかつた。で、私は半日餓を抱えて、小口瀬戸から能登の東海岸の方へと出て行つた。今でもその時のさまがはつきりと眼に映つて見えるやうな氣がする。あのひろひろとした海、その向うに見えてゐる能登半島、半は丘陸を成してゐる高原の上にところどころに高く燃え上つてゐる焚火の烟、徒崖の中に人知れずかくされてあるやうな宇出津の港、小木の港、赤くはげた崖に生えてゐる褐色の松、鯖釣りに何隻となく揃つて出かけて行く船、小木の港を一面に埋めるやうに入つて來てゐる船、その上にある二階づくりの旅舍、その旅舍の欄干から遙かに指さされる立山の連峰、九十九灣の靜かな海、それからずつと飯田から珠洲の鼻まで――それを思ふ

と、あの海のどよみがはつきりその前にあらはれて來るやうな氣がした。

私は珠洲の鼻までは行つて見たけれども、あの北の果ての輪島へはまだ行つて見たことがなかつた。私はその時珠洲の鼻からそのまゝそこに廻らうとしたが、その海岸は非常に路がわるく、そこを行くよりも、一度和倉まで汽船で引返して、そこから馬車なり車なりで行く方が好いといふので、そのまゝ此方へと戻つて來たが――和倉まで來たが、矢張何の彼のと都合が出來て、たうとうそこに行くことが出來なかつた。

『惜しいことをしたよ』

かう私は何遍も人に話した。

『なアに、あんなところに行くのはわけはありませんけども、行つて見たところで大したことはありませんよ。十年ほど前にすつかり火事で燒けて、町はひどくなつた筈ですが、その後恢復しましたが何うか。さうですな。和倉から向うは丸で山と丘の中の田舍道です。何にも見るものはありやしません。海だつて、ちよつと見える位のものです』輪島に行つたことがあるといふそ

の地方の人は、こんなことを言つた。

『でも、峠があるでせう？　あの峠からずつと北の海に向つて下りて行く感じは好ささうぢやありませんか？』

『大したことはありませんよ』

『海は見えるでせう？』

『見えるには見えます？』

『暗澹とした北の海！　と言つた感じがするだらうと思ふんだが――』

『想像して置く方が好いでせう？　屹度？』かう言つてその人は笑つた。

今それがまた思ひ出された。その欄干の安樂椅子で。さびしい海と冷めたい雨とを前にして…。

二十二

『近畿の溫泉――成るほどさう澤山はありませんな。まア、一番溫泉らしいのは有馬でせうかな』

『有馬？　まア、さうでせうな。衰へた、俗化したところですけども、あれでも歴史にも名高い溫泉ですからな……。秀吉が淀君を伴れて入湯したり何かしてゐるんですから？　しかしその時分は、湯なんかも、もつと多かつたんでせうな？』

『しかし、それでも、あそこからは、また俗化したと言つても、さうひどく俗化した方ではありませんよ。六甲あたりに登れば、景色は好し、夏は涼いし、世離れてはゐるし、それに生瀬の方へ出て來る川に沿つた路なんか好いぢやありませんか？』

『さうですね、わるくはありませんね。しかし、有馬一つで、近畿を代表させるのはさびしい

ですね？』

『だから、上方の人達に取つては、北國の溫泉がありますよ。それに別府がありますよ。くれなゐ丸に乘れば、あそこまではわけはないですからな……。此頃では、上方の人達は湯治と言ふと、皆なあそこまで出て行きますよ』

『さうでせうな。別府まで行けば、たしかに溫泉氣分になれますからな……。しかし、有馬の他に、もつとありませんかな？　近畿に？』

『城の崎は何うです？』

『あ、あれも今では京阪の人達のためにある溫泉になりましたな……。大社線で行けば、京都から四時間と少しで行けますな……。あそこも好い……。しかし湯は矢張多いとは言へませんな。それに、あたりの景色だつて、平凡ぢやありませんか？』

『平凡は平凡ですな』

『とても、關東の伊香保とか、箱根とかいふわけには行きませんな』

『寶塚は？』

『あそこは俗地だ。溫泉場と言ふよりは、東京で言へば、淺草公園と言ふたやうな氣のするところだ……。』

『それはさうですな』

『それに、あゝいふところは、上方の人達に向くと見えて、生駒にもあゝいふところが出來たとか出來るとか言ふぢやありませんか？』

『あれは湯や演藝よりも、女買ひの方ですよ。』

『さうですか。女ですか？……その他に、嵐山の奥の溫泉、六甲の下のところにある溫泉、それから苦樂莊と言つたか何んと言つたか、ちよつと眺望の好いところがあるにはありますね。しかし、皆なつれ込を目的にしてゐるやうな旅舍ですね。湯はつけたりですね……。それに、上方では溫泉場を溫泉場らしくせずに、唯、湯があるといふ設備だけしかしてゐないやうなところがある。神戸の諏訪山の溫泉などもその一つですね？』

『だつて、あそこだつて、湯の量が少ないんですもの……。あれより發展の路はありませんよ』

『さうですかな……。それから、吉野の方に行くところに、葛といふところがあつて、温泉がありますね？』

『あれはわかし湯です……。それに下等です。とても温泉などと言へるものではありません』

『さうですかね……。かう數へて來て見ると、ねつからありませんな……。まア、そんなもんですかね？』

『大和の奥か、紀州かに入れば、また隨分あります』

『紀州では龍神ですか。それから鉛山ですか？　もつと奥では、熊野の本宮の近くに、湯の峰温泉がありますね。それから勝浦の近所にもありますね……。しかし、皆な遠い。それに、交通が不便だ。そんな方に行くよりも北國とか、別府とかに行く方が行き易い……。』

『それはさうです』

『從つて設備がわるいのにきまつてゐる。とても都の人達の入れるやうな温泉ではないのにきとても都の人達の入れるやうな温泉ではないのにきまつてゐる……。それから、大和の奥に入るといふ字と波といふ字を書いて、何とかなまつてよませる温泉がありますな？』

『入といふ字に波といふ字？　そんな温泉がありましたかな？　何處ですツて、吉野の奥ですツて？』

『何でも吉野川の上流の方だと覺えてゐますがね？』

『あ、わかつた、わかつた——しほのは温泉！』

『あ、しほのは！　さうだ、さうだ。おもしろい不思議な讀み方をさせゐると思つてゐた。あそこは好い温泉なんでせう？』

『でも、あんな山の中？　とても駄目ですな。京や大阪の人達はあんなところには行きませんな……。あそこよりは、まだ鉛山なんかの方が行き好い？　鉛山なら、大阪商船のあの熱田通ひの汽船に乘る勇氣さへあれば、半日と少しかゝれば行けるんですからな……』

『しかし、あのしほのは温泉は、山の温泉として、ちよつと面白さうぢやありませんか。渓流

のすぐれた眺めなどがあるさうだが――』

『それは吉野川の上流だから、ちつとは景色の好いところもあるでせうけども、何しろ、上市から十里も山の中ですからな……。それに、材木商人に荒されてゐますからな……。とても靜かといふわけには行きませんよ』

『でも、俥が通ふには通ふさうですね？』

『俥が通つたッて、山路ですからな。あんまり樂でもありませんよ』

こんな話はそれからそれへと長く續いた。

二十三

吉野に溫泉があつたら――そしたら、箱根以上のすぐれた賑かさを持つたであらう。否それは溫泉がなくとも、單に山としても、遊覽の客は常に絶えないやうなところであつたけれども…。

後醍醐天皇が吉水院にゐて詠まれた御歌の中に、花にねてよしやよしののよし水の枕の下に石はしる音といふのがあるが、その石走る音は今でもはつきりと旅客の寢覺の枕のもとにきこえて來るが、その谷底に鑛泉が出て、それをわかして浴客の來るのを待つてゐるといふことであつた。しかしいかにしても設備が十分でなかつた。唯、一軒の浴舍と小さな浴槽とがある許りであつた。

しかし吉野は好かつた。近畿地方では、山としては先づ先づ吉野にとどめをさゝなければならなかつた。京都附近にも貴船とか、鞍馬とか、大原とか、高雄とか、好いところがあるにはあるけれども、その深さに於て、嵐氣の饒さに於て、とても此、彼に及ぶべくもなかつた。宇治も好

い、奈良も中々好い、――しかし更に更に吉野は好かつた。

私はこの初冬に奈良から吉野へと旅行した。從つてその印象は今だにはつきりと頭に殘つてゐた。奈良では、藥師寺のある西の京で半日を暮らした。落葉のガサガサと散る田圃道に夕日が斜にさしわたつたさまは何とも言はれなかつた。唐招提寺の疎らな林の中には、殊に色の濃い紅葉があつて、遠い遠い昔のことが脈々として私の胸に迫つて來た。

奈良で一夜泊つた。それは丁度猿澤池の畔で、小さなせゝらぎがすぐ下にきこえるといふやうな旅舍の一室であつた。月は明るく池を照した。鹿の聲が玲瓏として笛のやうにあたりに響いてきこえた。

あくる日は、朝早く石上神宮に行つた。つゞいて三輪に行つた。そこでは古い土佐派の繪畫の故郷に來たやうな氣がした。綠色の濃やかな杉に染めたやうな紅葉の添つてゐるのも繪を見るやうな氣がした。長谷の觀音の舞臺から見下した紅葉もわすれかねた。

それから私は飛鳥に行つた。岡寺に行つた。壺阪に行つた。高取のあの古い町をも通つて見た。

そして最後に吉野口から汽車に乘つて下市に行つた。あの六田の渡であつたところに、大きな鐵橋がかゝつてゐるのなども、久しくやつて來なかつた私の眼を歡ばせた。

そこから私は車でのぼつた。いかにもあたりがさびしくつて好かつた。竹藪の蔭に水車が廻つてゐたり、疎らな林に微かに夕日がさし殘つてゐたり、ほのぐらい杉の下道に目のさめるやうな紅葉がくつきりと鮮かに見えてゐたりした。折れ曲つた道は、一町目毎に立てられてある石標について更に曲つて、谷を前に展いたり、絕壁を欹たゝせたりした。深い大きな谷があらはれて來た。

山の脊のやうなところにある吉野町――表が一階で裏は三階にも四階にもなつてゐるやうな町、冬は山からおろして來る風が寒いので、全く裏の方の戸は閉め切つて置くといふやうな町、その町のところどころに、例の藏王堂があり、金剛峰寺址があり、吉水院があり、竹林院があり、勝手明神社があり、更に谷を越して向うに塔尾の山陵と如意輪寺とがあるのであつた。南朝五十年の悲しいあとは、歴々とそこに殘されてあるのであつた。

私は夜おそく旅舍について、わざ〳〵わかして呉れたらしい古風な五右衛門風呂に入つて、ひとり靜かに自分の姿をその深い谷に臨んだ欄干に見出した時には、何と言つて見て好いかわからないやうな氣がした。私は頭のキィと緊めらるゝやうなのを感じた。戸外には薄月があつて、それか向うの山、更にその向うに欹つた城壁のやうな山に微かにさし添つてゐるのを私は目にした。否、そればかりではなかつた。その深い谷の底にはその小さやかな溪流の石に咽ぶ響が、微かに微かに、心をそつちに誘はずに置かないほど微かに傳へられてゐるのを聞いた。

『好いな！　何とも言はれないな！』私はじつとひとり立盡した。

二十四

前にも言つたやうに、紀州にはかなりに溫泉がある。それに、風景にもすぐれたところがある。近畿地方にはめづらしいと思はれるやうな深い山もあれば、荒い海もある。怒濤もある。深潭もある。奇岩もある。しかし、いかにしても交通が不便なので、旅行好きの人達も滅多にそこまでは入つて行かなかつた。

今では和歌山から田邊まで自動車が行くであらうし、それから先きも俥はあるところまで通ふのであるから、一奮發すれば、ひどいと言つたところで、さう大してひどいとも思はれない…。まして船に弱くなく、大阪商船の汽船に乘ることを何とも思はない人達は、那智山にも、新宮にも、勝浦にも、鉛山にもわけなく行くことが出來た。

海では潮岬あたりの眺めが最も雄大であつた。怒濤――すざましい怒濤、まごまごすれば、甲

板の上までザアと洗はれて了ふやうな怒濤、それがいつも天を呑むやうにした。それを辛うじて免れて、串本なり、勝浦なりに着いた時には、人達は皆なはつと呼吸を吐いた。『これだから、紀州には容易に入つて來られないよ。命がけだからね』やつと眩惑と心配と船酔とから免れた旅客達は、こんなことを言つて互ひに顏を見合せた。

近畿地方から紀州に入つて來て、先づ第一に目に着くのは、あたりの色彩の非常に濃やがであることであつた。杉の葉の色でも、密柑の葉の色でも、すべて非常に綠が深かつた。それに水蒸氣の多い爲めか、空氣が常に重くしとしとしてゐて、そして影が厚く且つ深かつた。晴れた日には、殊にその光線が鮮やかであつた。何の事はない、天城を越して、北から南伊豆に行つたやうな感じがした。

陸路は田邊から入るものと、五條から賀名生を經て十津川に入り、それからずつと本宮へと出て行くものと二つあるが、近いのは前の方が近いが、面白のは後の方であつた。峠を越して十津川の岸に出て、それから曲りくねつた溪流に添つて下つて行く風景は、ちよつと他にも澤山はなかつた。それに比べて、田邊からの路は、間に峠が三つまであつて、人通とても甚だ稀であつた。今では、あそこを通るものなどはなくなつて了つたであらうと思はれた。

その代り、この路を行けば、すぐに湯の峰の溫泉に行くことが出來た。丘の中に埋れたやうな溫泉場、それでも湯の量は多く、熱度も高く、近畿の溫泉といふ感じよりは、何方かと言へば、東北の溫泉といふ感じに似てゐた。好い溫泉だッた。紀州の溫泉の中では、一番ラスチックな靜かな溫泉といふことが出來た。

本宮から熊野川を下る。この間は天下の奇勝と言はれてゐる。耶馬これに及ばず、玖磨、天龍、これと相伯仲すと言はれてゐる溪谷である。五里ほど下で左に北山川を容れる。水は益々多く、溪は益々美しくなつて行く。

いかにして
種は生けんと
おもふまで

たかき高根に
花の咲くかな

見上ぐるばかり高いところに山櫻が咲いてゐる。白くかたまつて咲いてゐる。それから少し行くと、谷と谷との間から、一條の瀑が匹練のごとく落ちてゐる。『あ、あの瀑！　何うだ！』かうした言葉が思はず私の口から出た。

『それで、その北山川をまだ上るんですね？　瀞八町へは？』

『さう――？　何でもその合流點から三里位山の中に入つて行かなければならないと思ふ…』

『路はわるいですか？』

『あんまり好くはありませんな。四瀧のわたしを渡つて、竹筒、九重などといふところを通つて行くんです……。さうですな、山の半腹のやうなところに路がついてゐて、下に深く深く北山川を見下して入つて行くやうなところです？　この北山川といふ溪谷が幾重にも折れ曲つて行つてゐるやうな深い皮肉な谷ですからな』

『舟も通るんですか？』

『通るには通るけども、のぼりは遲くつて駄目ですよ。』

『實際好いところですか？』

『瀞ですか……？　さうですな、まア好いところですな……。あれだけの深潭――碧く深く、且長く湛えられてあるのはあまり多くはないでせう。岩石よりも潭の美ですな……』

紀州の山路のわるい話をした時には、『何しろ、地圖には國道乃至縣道になつてゐながら、車が通れないやうな路なんですからな……。熊野川の沿岸の路などはことにひどいですよ。猿でもなけりや通れないやうなひどい路でしたよ。それといふのも、交通の便が、すべて川に賴つてゐるからですな。歩くものなんかないんですな！』こんな風に私は話した。

新宮は好いところであつた。秦の徐福の墓などがあつた。海はすぐそこでありながら見えずに、四面を低い山巒で圍まれてゐるやうな町だつた。こゝから丘を一つ越して、西に三輪崎の港があるが、これが主として新宮への港として役立つてゐるやうであつた。このあたりは、蜜柑や夏蜜

柑が多く、到るところにその黄顆の熟してゐるのを目にした。

あの大きな那智の瀧は、まだその那智山の町に入らない中から見えた。いかにも雄大であつた。また綺麗であつた。町を通り過ぎて、杉並木の磴道にかゝつて行くと、瀧の姿は益々はつきりして來て、『はゝア、これが那智の瀧かな！』と思はせた。一歩は一歩毎に立留らなければならないやうな氣がした。それほどあたりはひらけて、はつきりしてゐて、そしてまたかくすところなくあらはれてゐた。そのため、いくらか山が淺く感じられるくらゐであつた。

『行きましたか？　あの瀑壺のところまで――？』

かうある人から訊かれて、

『行きましたよ。しかし、あの亭のあるところから下へは、しぶきがひどいんで、ずぶ濡になるつもりでなければ、とても下りて行かれませんね……。でも、あそこまでは行きましたよ』

『それはえらい……。あそこから見ると、かなり大きいでせう？』

『さうですな……大きいですな……矢張、何と言つても、その大きさに於ては、屈指のもので

すよ』

『あれから、大雲取、小雲取をお越ぇになりましたか？』

『いや、あれは行きません……』

『あれを越すと、中々好いところがありますよ』

『さうですッてね……。そつちに行くといふ旅客と一緒になつて、餘程、向うに行きたかつたけれど……、さうすると、熊野川の方が見られなくなりますからね』

『では、那智山から、新宮までまた引返したわけですね？』

『さうです』

かうした話は私をその時分に伴れて行かずには置かなかつた。紀州の惡灘百里――それを一日か、つてやつと突破して、日の暮れる頃、漸く三輪崎の港の人家の見えるところへと來て、そして汽船は汽笛を鳴したつ波は凄しく荒れに荒れわたる……。その中を一隻の艀が上へ下へと浮んだり沈んだりして、やつとのことで、沖の汽船へと近づいて來る。甲板の上からは荷を投り出す。

降りる人達は毬か何ぞのやうにその小さな艀の中にころがり込む――そしてそれがすむと、汽船はすぐ凄しい煤烟をあたりに漲らせながら、シュ、シュと言つて航行し出した……。私は疲れ果てゝ、やつと三輪崎の旅舎まで辿り着いたことを思ひ出した。その旅舎の室の裏は、すぐ海で、茫と白く暮れかゝつた中に鷗が群を成して飛んでゐたのを私は今だにはつきりと思ひ浮べることが出來た。

二十五

この頃は大社參拜が流行した。東京からでも團體を組んで、はるばる出かけて行くものが澤山ある。春はことに多いやうだ。

この山陰線にも見るところは非常に多い。一々細かく入つて行けば、めづらしいところもかなりにある。しかし、汽車でゆけば、割合に簡單だ。寄道さへしなければ、半日と少しで京都から大社まで行くことが出來た。

緩くりした旅なら、天橋立を見て宮津に一泊、その次ぎの日は、城の崎に一泊といふ順序であるが、天橋立に行くのがちよつと臆肱だ……。しかし、成るべくは行つて見る方が好い。

そこに行くのには、綾部で乘換へるのであるが、京都からその綾部まで行く間が既に面白かつた。そこはいかにも山の中で、あの京都のすぐ近くにかうしたところがあるかと思はれるくらる

であつた。林が多く、未墾地が多く、低い山が多く、春は山躑躅などが到るところに咲いた。殿田などといふところは、ことにさびしいところであつた。綾部に近く、次第に和知川の谷があらはれて來て、段々それが大きな流になつて行くさまなども旅客の思ひを惹いた。

綾部で、尼ケ崎を起點として南北に通してゐる阪鶴線を待ち合して、それに乘つて舞鶴へと行く。この間には停車場が一つか二つあるばかりで、すぐ行き着くことが出來た。そこからまた軌道に乘換へて海鵬鶴に行く。

こゝから宮津への連絡船が出た。

この海は美しい海の一つであつた。つまり敦賀、小濱、舞鶴、津居山といふ一線につゞいた徒崖を持つてゐる海で、裏日本ではことに風光のすぐれたところであつた。しかしこの連絡船はかなりに動搖した。時には乘つてゐても危險に思はれるやうなことさへあつた。冬は連絡不能になることもをりをりあつた。この汽船では、舞鶴軍港の活躍した一部を右に見て行くことが出來た。また、碧い海に島嶼の點々として散在してゐるのを見て行くことをも出來た。否、出て行くにつ

れて、海は潤く潤くなつて行つた。由良川の海に注いでゐるさまも、大江山の高く雲間に聳えてゐるさまも、岬と岬と相對して海を擁してゐるさまも、すべてはつきりと手に取るやうに指すことが出來た。そして次第に、天橋立の長松を右に、左に簇々とした宮津の瓦甍を目にするやうになつて行つた。

橋立の
きれ戸をわたる
苫舟に
小雨そぼふる
わびしきや妹

さうした歌を私はそこで詠んだ。それは細かい糠のやうな雨の降つてゐる日であつた。山には藤や躑躅の咲いてゐる頃で、灰色をした雲が簇々と周圍の山々を包んだ。そしてその苫舟を碧い、碧い海が取卷いて、鷗が三つも四つもふわりふわり浮んでゐた。『あの鷗のやうに我々も世の中を

渡つて行かなくつては駄目だね……。あのやうに靜かに、落附いて、そして沈まずに――』こんなことを私は言つた。

切戸を越してから、波は靜かになつて行つた。船の底はをりをり藻の上を掠めるやうにして通つて行くが、その音が、サ、サ、サと微かにきこえて、それがいかにもなつかしい、詩のやうな感じを私に誘つた。向うの山からは、雲が烟か何ぞのやうにふわふわと卷き上つた。

私は舟を橋立神社のあるところへと着けさせて、そしてそこから岸にのぼつた。いかにも靜かであつた。いかにも繪のやうであつた。女の派手な蝙蝠傘があたりに伴つて見えた。

岩見重太郎の仇討をしたといふ跡などを見て、そして再び私達は船に引戻した。幸ひにして雨は止んだ。艫の音は靜かに長い松林に響きわたつた。

舟を捨てたところには、一軒の旅舍があつて、一面に藤の花が亂れ咲いてゐるのを私達は目にした。『まア、綺麗ね？』かう女は言つて立留つた。

私達はそこで藁草履を借りた。これから傘松まで十二三町ひたのぼりになつてゐるといふことであつた。やがて路は疎らな松林の中から、お宮の境内を通つて、次第に山路へとかゝつて行つた。かなりに急な勾配が私達の前にあつた。一二町行つては休み、また一二町行つては休んだ。しかし五六町行つて振返つた時には、私達は思はず聲を擧げた。

『好いな――』

縱一文字の長松――先の方に行つていくらか曲つてゐる天の橋立は、何とも言はれない媚態を私の前に見せてゐるやうな氣がした。美しく、やさしく、また素直に。

『まア、何んて好いんでせう』女もかう言つて立留つた。

水蒸氣の多いのが殊にその光景を深く見せた。いかにも瀟洒で、そして落付いてゐた。美しい女が、『まア遠いところをよく來て下すつた！　しかも、お二人づれで――』かう言つて迎つて呉れてゐるやうに思はれた。

傘松のあるところは、縱一文字を見るには最も好いところであつた。そこから見ると、長松のある内と外とでは、海の色は著るしく違つてゐた。外の濃い碧であるのに引かへて、内はわるく

灰色になつて見えてゐた。それだけ内の方が初期の潟湖になりつゝあるのであつた。私はじつと眺め盡した。

この他、但馬街道の樗峠が、天の橋立を見るにつけての好位置として數へられてゐた。そこからは横一文字に橋立を見ることが出來た。

宮津で一夜泊つて、あくる日は、連絡船が厭なら、その海岸を自動車で舞鶴までぐるりとまわつて來ることが出來た。この間にも、由良川の河口だの、伊勢神宮以前の神宮の址だの、山椒大夫のあとだのを見ることが出來た。

で、再び綾部に來る――それからまた山と山とが續いた。つまり丹波丹後から但馬に跨つた高原性山塊の中を汽車は通つて行つてゐるのであつた。それでも福知山町のあるところだけは、山がやゝひらけて、川があつたり、橋があつたり、野があつたりしたが、そこを出ると、山また山で、いかにもさびしい感じのする山村ばかりがつゞいて行つた。かうした感じは、東北地方では、とても見ることが出來ないものであつた。しかし停車場を經て行くことに、次第に溪流が大きく

なり、せゝらぎが美しくその前に展開されるやうになり、猪垣があちこちに見えるやうになり、やゝひろい野を山巒の彼方に見るやうになつた。そこに豐岡の市街のある野がやつて來た。矢張、山に圍まれてゐるが、それでも夕日が長く長くさし込んで來てゐた。川が靜かに緩やかに流れてゐた。

もはや城の崎はそこからいくらもなかつた。汽車は圓山川に添つて、次第に其方へと近寄つて行つた。やがて例の玄武洞のある徙崖が川の向うに白く際立つて見え出して來た。薄暮の色は既にあたりに迫つて來てゐた。

汽車は留つた。

『きのさき、きのさき』かういふ車掌の觸れ聲は、旅客の心をそゝり動かさずには置かなかつた。そこには溫泉がある。ゆつくり旅の勞れを慰めることが出來る。かういふ氣がする。で、急いで下りて、構外に客待してゐる俥に乘る。

『どちら？　お宿は？』